

バルタン星人の奇妙な野望

チキンライス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フォッフフォッフフォッフオ(V) o?o (V) ↑こいつが主人公
ジュアツ(o—o) ↑脇役

目次

第一話	来襲	1
第二話	相對	14
第三話	現状	23
第四話	逃亡	32
第五話	発覚	43
第六話	途方	52
第七話	出現	61
第八話	答弁	70
第九話	あの人たちは	84
第10話	バルタンレポート1	91
第11話	バルタンレポート2	100
第12話	バルタンレポート3	108
第13話	バルタンレポート4	119

第一話 来襲

「銀座事件」。

突如出現した『異世界への門』から出現した侵略者。

そしてそれを撃退した自衛隊、及び宇宙人。

世界は、人類はその日、目撃した。

それまで創作や空想の中でしか存在しえないと思われていたゴブリンやオーク、エルフといったファンタジーの住人。

そして人々を取り巻く広大な宇宙には、私たちがまだ知り得ない知的生命体がいることを。

そしてここではないどこか。次元を超えてやってきた、光の戦士。そのライバルである、とても有名な宇宙人。

ウルトラマンと、バルタン星人に地球人は出会ったのだった。



その日はとても蒸し暑い日であった。

寺島鋏魅はその時、銀座の喫茶店にいた。

モダンなデザインの、こじやれた雰囲気の中、一人で席に着いていた。

時刻はもうじき、正午になろうとしている。

すでに店内は昼食を求めてやってきた人々であふれかえっている。

この店ではパスタやドリアといった軽食もメニューに有り、ランチサービスとしてドリンクが無料となるのである。

それを求めてきた奥さま方、買い物で街に繰り出してきた学生、一休みにと涼みに来た作業着を着たおじさんと、客層は様々である。

すでに何人もの従業員が、いそいそと席と席の間を動き回っている。

その光景を、寺島はぼんやりと眺めていた。

寺島の席には、飲みかけのアイスコーヒート、シャープペンシル、書きかけのルーズリーフが置かれている。

寺島は肘をつきながら、せわしなく変化していく店内を眺めていた。

一口、すでに温くなったコーヒーに口をつける。

苦い、ブラックのコーヒーが、のどを滑り降りていく。

ふと、書きかけのルーズリーフに目を落とす。

何度も消しゴムで消したような汚れが残った、しわくちゃな紙だ。

寺島はシャープペンシルを手に取った。

しかし、何か書き始めるわけでもなく、再び店内の様子をぼんやりと眺め始めた。

もう2時間近く、こうして座っている。

それでもルーズリーフは埋まらず、視線は宙をさまようだけだった。

店の入り口付近には、席が空くの待っている人の姿が見えてきた。

潮時か。

そう思い、荷物をまとめて席を立つ。

黒色の小さなリュックサックを背中に背負うと、伝票を持って入口に向かう。

「500円です」

レジでは先ほどまでせかせかと動いていた店員に相手をされた。

まだ若い男の子の子のである。

巷で流行っているブランドの、折り畳みの財布から500円玉を取り出し、店員に手渡す。

「ありがとうございます」

店員の声を背に受けながら、寺島は店を出た。

天に昇った陽の光は、憎らしいほどよく寺島を照らしている。

大勢の人々であふれかえる銀座の街並みを、寺島はあてもなく歩き始めた。

波の一部として、正午の街並みを歩いていく。

人々の会話、ディスプレイから流れてくる宣伝、客寄せの掛け声、様々な音が寺島の中に入っては出ていく。

その中で、この日本に似つかわしくない音が、ふと寺島の耳に入ってきた。

女性の悲鳴である。続いて、男性のものも。

それは寺島の後ろから聞こえてきた。

不思議に思った寺島が振り返る。

横目に見えた人々も、後ろに視線を向けていた。

寺島の身長は、170センチ超。

人の波に埋もれた彼の目には、立ち尽くす人々の姿しか見えなかった。

それでも、悲鳴が次々と耳に入ってくる。

ホラー映画の宣伝でもしているのかと、最初は思った。

それにしても、真に迫った悲鳴だった。

妙にリアリティのある悲鳴である。

変化が起こったのは、少ししてからだった。

立ち尽くして声のした方角を眺めていた人々の間を、走り抜ける人々が出てきたのである。

必死の形相で、何かから逃げているようであった。

まだ視界に入らない寺島を含めた人々にとっては、事態の把握は困難であった。

やがて走り去る人々の数が増えていくにつれて、寺島にも見えてきた。

彼の視界には、鋼の鎧で武装し、剣を持った男が駆けてくる姿が見えたのである。

現代社会に似つかわぬ馬に乗った男が、鈍く光を反射する剣を、近くにいた女性に振りかぶる。

女性の体から赤い液体が出、そのまま力なく地面に倒れ伏す。

またも近くで悲鳴が上がった。

阿鼻叫喚だった。

人々は近くの人を押しつけて、我先にと逃げだしていく。鎧を身につけた人々の標的となるのは、まず逃げ遅れた人々であった。

動きの鈍い彼らは、馬で追い立てる彼らの格好の標的となる。

無抵抗な現代人は、どこからともなく現れた異世界人によつて蹂躪されていた。

寺島は突如として出現した現状を、理解できなかった。

つまり、鈍かったのである。

そして、棒立ちになつて立ち尽くす男を見逃す者でもなかった。

馬が駆け、寺島の視界には剣を振りかざした男が。

そのまま、鋼の切っ先が寺島の胴体に吸い込まれていき――

◇

伊丹耀司は憤っていた。

せつかくの休暇、年に二回開催される祭典を、彼は楽しみにしていたのである。

しかし、突如として銀座に出現した、『門』から現れた異世界の軍隊が人々を攻撃し始めたのである。

戦争であった。

無抵抗のまま、血を流し絶命していく人々。

それを見て嗤っている蛮族。

自衛官として日々訓練している伊丹は、突然出現したこの非常事態においても即座に行動を開始した。

逃げ惑う市民の誘導を開始したのである。

しかし、門から次々と敵が現れてくる中で、闇雲に逃げるのは危険である。

そこで伊丹は、駐在していた警官数名と協力して、皇居に立てこもることにした。

数百年前では立派な籠城施設であった皇居に市民を誘導すること

で、市民の犠牲をなくす。

伊丹の機転は、最初は受け入れられなかったが、非常事態故、認可があり、市民の誘導が開始された。

伊丹は警官と協力しながら近づいてくる異世界人を無効化した。嫌な音も聞いた。

力足らずに目の前で失った命もあった。

それでも彼は、日本国が誇る自衛隊が到着するまでに、何百、何千人もの命を救ったのである。

彼は後に英雄として表彰されるまでもなる。

しかし、事態はそれだけにはとどまらなかった。

誘導を行っていた彼の頭の中に、突然「声」が響いてきたのである。



『武装を放棄し、自分たちの世界に帰れ!!』

そのような言葉が、突然頭に流れてきた。

それは銀座を逃げまどう地球人のみならず、「門」の外からやってきた異世界人の頭にも同様のことが起こっていた。

それだけでなく、オークやゴブリンといった蛮族、果てには空を駆る小型の飛龍にまで声の影響は及んでいた。

彼らの頭の中では、彼らが使用する言語に変換されているようである。

つまりは種族によって、適当な形で翻訳された言葉や意思のようなものが、適当な形で伝達されたということになる。

後に判明したことであるが、強力なテレパスが銀座一面に力を及ぼしていた。

突然頭の中に響いてきた「声」に人々は動揺したが、異世界の軍隊の将軍クラスは立ち直りが早かった。

「声」を無視して、仲間叱咤激励を行う。

再び、侵攻を開始した。

再び、「声」が響いてくる。

『よろしい。ならば抵抗が無意味であることを教えてやる』
そして銀座の街中に、巨人が出現した。

◇

声が出せなかった。

銀座を逃げ惑う人々も。

「門」の外からやってきた軍隊も。

再び「声」が響いた後で、巨大な影が出現した。

それは立ち並ぶビルよりも大きかった。

それはぎよろぎよろと動く二つの目で、こちらの姿を見下ろしていた。

それは厚い鉄板も紙のように切り裂く鋏を上下に揺らして、嗤っていた。

「フオッフオッフオッフオ」そのような不気味な嗤い声で、人々を見下ろしていた。

異世界から来た来訪者は、こんな巨大な生物を見たことがなかった。

地球にいた人々は、それはフィクションの中の存在だと思っていた。

両者が少し違うニュアンスだが、信じられないように目を見開いていた。

誰かがその正体を呟いた。

「フィクションバルタン星人」

創作の中にしか存在しなかったあのバルタン星人が、銀座の街に現れたのである。

◆

バルタン星人。

初登場は、『ウルトラマン』第二話「侵略者を撃て」。

セミに似た顔に、ザリガニをモチーフとした大きな鋏が特徴の、宇宙人である。

身長はミクロから50メートルほど。

体重も大きさに合わせて変化させることができ、地球に対しても、ウルトラ一族に対しても幾度となく攻撃をかけてきた。

特撮のウルトラシリーズで出てくる怪獣たちの中で、1、2を争うほどの知名度を誇り、ウルトラマンのライバルでもある。

弱点は、火星にあるというスペシウム。

ウルトラマンの必殺光線は、ここから名前がきているとされている。

それが、この世界でのバルタン星人に対しての認識であった。

太い、響くような低い声がバルタンから放たれる。

バルタン星人の特徴として、「フオッフオッフオッフオ……」という笑い声あげられるだろう。

異世界から来た軍隊も、銀座で逃げ惑っていた人々もあつけにとられてその光景を見ていた。

50メートルという巨体は、思っている以上に大きいものだ。

東京タワーから始まり、日本の首都である東京には、それ以上の高さの建物がいくつもあつた。

しかし、50mクラスの動く生物——しかも二足歩行的のものを、あなたは見たことがあるだろうか？

異世界からの侵略者も、声も上げられずにいた。

自分たちの世界での大きな建造物といえば、城だろうか。山も、大きい。

生物としては、竜種があげられる。

しかし、前時代の建築技術しか持ち得ていない彼らにとっては、50mの建造物を造ることは、一朝一夕の出来事ではない。

竜種を見たことがあるものなど、何人いるだろうか。

おそらく、その竜ですら今のバルタンの半分にも満たない小さな存在だ。

そんな巨体が、こちらを見下ろしているのである。

灰色がかった黒の体軀、鈍い銀色に輝く二つの鍔、黄色に光り輝いている大きな眼。

こんな生物を、見たことがない！

『さあ、どうするか決めよ。大人しく自分たちの世界に帰るのなら、今は見逃してやる』

再び、頭の中に「声」が響いた。

異世界から来た者たちが、その威圧感に圧倒されていた。ただその場に立っているだけだ。

それなのに、圧倒される。

絶対的な力の差が、そこにあった。

皇居に避難した住人、銀座に駆けつけている自衛隊、そして誰かが撮影した映像を見ているテレビの前の人々。

その全てが、存在を認知していた。

バルタン星人が足踏みすること、銀座の大地が揺れた。

バルタン星人が嗤うごとに、空が震えているようだった。

映像は広まっていく。

日本を超えて、世界中に広まっていく。

『さあ、どうする？』

もう一度頭に流れた誰何の言葉に、異世界の軍隊が動きを見せた。

彼らは無謀にも、バルタンに戦いを挑んできた。

沈黙した銀座の街並みに、軍の司令官と思しき男の怒声が響いた。

それに呼応するように、騎士たちが、蛮族が、飛龍たちが手を上げる。

剣を振り上げ、バルタン星人に向かってくる。

ローブ姿の人々から、色とりどりの魔法が放たれた。

人を乗せた竜の口から、炎が吐き出された。

足元に殺到した蛮族たちが、それぞれの得物を振りかざす。

だが悲しいかな、バルタンの強靱な皮膚には傷一つつけることは叶わない。

逆に蛮族たち、騎士たちが振りかざした武器は、折れたり欠けたりして使い物にならなくなっている。

魔法も炎も、バルタンの巨大さから見れば屁のようなものだった。

『それが答えか——』

いいだろう、と声が響いた。

次の瞬間、そこにいた人々の体が宙に浮いた。

人も、獣も、自動車も、地面に固定されていないものがすべて、重力に逆らうように空へと浮かび上がっていく。

人々は体が制御できないまま、宙を漂っていく。

そこらかしこで様々な悲鳴が上がっている。

バルタン星人はその光景を目にして、無機質な目で笑っていた。

あの特徴的な笑い声をあげて、彼だけは重力があるように振舞っている。

竜が宙を泳ぎ、バルタンに火を吐いた。

バルタンは煩わしそうに鋏を振るうと、ハエを追い払うように竜をビルに墜落させてしまった。

力なくうなだれた竜は、再び重力に逆らうように風船のように宙に浮かんでいく。

『どうした、これは戦争だろうか？』

頭の中に流れ込んで声が、こちらを煽り立てる。

違うと、異世界からの侵略者たちは皆が顔を引きつらせながら思った。

こんな戦いが、あつてたまるか。

地面があんなにも遠いものとは知らなかった。

宙に浮かぶ我々が、これほどまでに無力な存在とは知らなかった。

そして眼前で笑っているこの「化物」は、一体なんなんだ？

無力感、悲壮感、そして絶望。

彼らの心は、それらの感情を混ぜ合わせたような様相を醸し出していた。

遠目に見えるバルタン星人が引き起こした銀座の情景に、人々は複雑な思いを抱いていた。

バルタン星人は本当にいたのか。

——何しに来たのか。

地球を侵略しに来たのか。

ウルトラマンはいるのか。

銀座は大丈夫なのか。

それぞれが眼前で、テレビの映像の前で思いを抱いていた。

彼らはパニックのさなかにいた。

今日だけでも、異世界からの侵略者に加え、創作の住人であった宇宙人が現れたのだ。

混乱、それが収まってもこの動揺はしばらくおさまらないだろう。

自衛隊は事態の推移を少し離れたところから見守っていた。

先に近づいた部隊が、反重力の領域に引っかけかり、宙ぶらりんとなってしまっただからである

近づくことは困難、及び国民がいる銀座の街中への火薬兵器の使用は許可が下りず、遠目から様子を伺うよりほかなかった、

『さあ、どうしてくれようか——』

その声に侵略者たちは顔を青く染める。

——と、そこに、

「——ジュワツ!!」

空に裂け目が現れ、そこから蒼い戦士がやってきた。



ウルトラマンゼロ。

かのウルトラセブンの実子であり、光の国の若きヒーローである。

上半身が青く、下半身が赤を基調とした珍しい体色をしており、父譲りの『ゼロスラッガー』を頭に二本も装備している。

土を巻き上げ地面に降り立った彼の体には、銀色の鎧が装備されていた。

とある光の神からゼロにもたらされた「ウルティメイトイージス」は、ゼロに比類なき力をもたらし、次元の壁さえ突破することを可能にする。

彼がこの次元にやってこれたのも、そのウルティメイトイージスの

おかげである。

人々が見ている中、巨人が立ち上がった。

『バルタン星人！こんなところにまで何しに来やがった!?!』

人々にはウルトラマンとバルタンの会話は聞こえない。

彼らは一種の思念波、テレパスで会話をしている。

仮に靈感、超能力を持つ人間であったとしても、そのテレパスの強さに瞬時に頭が破裂してしまうことだろう。

人々は突然現れたもう一人の巨人に対して、爆発的な反応を見せた。

多くの人々はケータイやスマートフォンを向けて写真や動画を撮っていた。

多くの人々が、バルタンの脅威から助かると、心をほっと落ち着かせていた。

多くの人々が、悪のバルタン星人をウルトラマンが倒してくれると、思い込んでいた。

バルタン星人がその光景に鼻を鳴らすと、ゆっくりと反重力を元に戻していった。

徐々に地面が近づいていき、宙に浮いていたモノが再び重力の支配下に置かれる。

少しして、完全に元に戻ると、浮かんでいた人々は皆涙を流して地面に立つ喜びを各々に感じ取った。

『上で話そう』

テレパスでそう言い残し、バルタン星人が空を飛ぶ。

それをウルトラマンゼロが追う。

二体の巨人を見送る中で、事態の推移を伺っていた自衛隊が異世界の軍隊めがけて突撃する。

もはや、抵抗する力もなく、侵略者たちは大多数がお縄になっていたのだった。

さて、上空では二人の巨人が向かい合っていた。

ウルトラマンゼロは、奇妙に思っていた。

目の前のバルタン星人から、敵意がまったく感じられないのであ

る。

バルタンの脅威となる二つの缺も、力なく垂れさがっている。

先ほど人間に配慮して反重力を解いたことといい、奇妙に思えていた。

『さて、話をしようとはいったが、我々には時間がない』

『どういうことだ？』

『光の一族である君はこの地球上では長時間活動することができないし、ぐずぐずしていると人間がここにやってくるだろう』

『人間たちに見られると何かまずいことでもあるのか？』

『それにはまずこの世界の話をしなければならぬ。……しかしその時間すら惜しい。よって場所を変えることにする』

『——なっ』

二人が光に包まれる。

あまりのまばゆさにゼロは目を閉じた。

光が収まり、ゼロが目を開けるとそこは一畳間の小さなアパートの中だった。

体も人間台に縮小しており、部屋の中がちょうどいい大きさとなっている。

『ここは？』

『私の今住んでいる家だ。——ああ、あつた。これだ』

バルタンは何やらガサゴソ探っていると、そこからさびれた指輪を取り出し、ゼロに投げ渡した。

『これは？』

『人間の姿に化けるための指輪だ。入力してあるデータは、地球の青年のものだ。それを付けたまえ』

『なんでこんなものを……』

『ウルトラ戦士の体で外を見回るわけにはいかないだろう。心配しなくても、私は逃げない。騙されたと思ってつけてみたまえ』

訝しめながらもゼロは人差し指につけると、光が彼の身体を包んでいく。

瞬く間に精悍な顔だちをした男性の姿へと変身した。

バルタン星人も自分のアイテムを使って、人間体——寺島鋏魅の姿に変わっていった。

「さあ、行こうか」

バルタン星人——寺島はゼロが服を身につけると、アパートの出口の扉を開いて外に出ようとする。

「どこに行くんだ？」

「近所の喫茶店だ。そこで話をしよう」

そう言ってゼロを連れてまだ陽があたる道を歩き出した。

◇

『銀座事件』はその日のどの夕刊の一面にも印刷されていた。

詳しいことはまだ分かっておらず、『門』に対する情報もそれほど多くはなかった。

これまで空想の産物であったファンタジー世界との接触は、人々に大きな衝撃を与えた。

しかしそれよりも大きな一面を飾ったのは、二つの巨人の姿だった。

とある新聞には、こう見出しがつけられていた。

『僕らの街に、ウルトラマンがやってきた!!』

第二話 相對

無限に広がる宇宙。

輝く星々の間を、悠遊と飛びまわる光があった。

ウルトラマンゼロ。

光の国の戦士である彼の使命は、宇宙の平和を脅かす者と戦うことである。

銀河の海を泳ぎ、悪がないか、彼は今パトロールを行っていた。彼の行動範囲は文字通り多岐に渡る。

まだ若輩の身ではあるものの、彼がこれまで行った功績は数えきれない。

漆黒の宇宙に、輝きを放つ星々。

美しい光景だ。

この光景を壊すことだけは、阻止しなければならない。

そうゼロが決意を新たにしたとき、彼の左腕につけられたブレスレットから光が放たれた。

それは一条の光の線となって、漆黒の宇宙で方向を示す。

空間が歪み、穴が開き、中の光景を映し出す。

映し出された景色には、彼がよく知る宇宙人の姿があった。

バルタン星人。

その周りに、宙に浮かんで身動きを取れなくなっている地球人の姿を見た。

——俺の出番か。

ブレスレットが形を変え、銀色の鎧となってゼロの身体に装着される。

光を纏い、ゼロは穴に飛び込んだ。

行先は、地球。

彼が飛び出した先の空は、青かった。

なるべく被害を出さないように、建造物の少ない場所に着地する。「バルタン星人！こんなところにまで何しに来やがった!?!」
これが、彼が地球に来るまでの出来事であった。



バルタン星人——寺島鉄魅は今、近所の喫茶店でウルトラマンゼロと向かい合っていた。

「お待たせいたしました。アイスコーヒーになります」

ウエイトレスが、寺島達が頼んだコーヒーを机に置き、ごゆっくりと言いつつ持ち場に戻っていった。

彼らは寺島の家に戻った後、歩いて近所の喫茶店の中に入っていた。

寺島の背には黒いバッグが背負われていた。

ウルトラマンゼロは、バルタンの科学で作られた人化の指輪を装備することで、人間の姿となっている。

宇宙人二人は、ともに人間の姿に化けて喫茶店に入った。

ここは寺島の行きつけの喫茶店だった。

個人経営のこじんまりとした店で、趣がある。

店主に断りを入れ、端の団体席に移動する。

テーブルをはさんで、寺島とゼロは向かい合っていた。

「それで、話つてのは?」

ゼロが話を促す。

「まずは礼を言わせてもらおう。——来てくれてありがとう」

そう言つて頭を下げる。

「正直に言うと、君がこうして素直についてくれるとは思っていなかった」

逃げる準備もしていたんだがなど、寺島が苦い笑みを見せる。

ゼロは鼻を鳴らすと、

「誰が逃げるかよ。それよりも、俺をここに連れてきた理由と、あの場で逃げた理由を説明しろ」

寺島はうなづくど、ごそごそと背中に背負っていた黒いバッグを漁りだした。

そして少し厚みのある本を取り出し、テーブルの上に乗せた。カラフルな着色が施された本だった。

ゼロはその本を見て目を見開いた。

タイトルは、『ウルトラ大全集』。

そして文字の下には、ウルトラマンゼロの姿が印刷されていた。

「——俺じゃねえか!?!」

どういふことだと、寺島をにらみつける。

寺島は中身を見てみると手で促す。

ページを開いてみると、ところどころカラーで、光の国の戦士の姿が描かれていた。

ウルトラマン、ウルトラセブン、ゾフィーたちウルトラ6兄弟。

ウルトラの父、母、ウルトラマンキング。

彼が知っている、違う宇宙出身のウルトラマンであるダイナ、コスモス。

そしてウルトラマンエックス。

更にはノアの神の姿まで描かれていた。

それだけではない。

そこには歴代ウルトラ戦士たちが戦ってきた、怪獣や宇宙人の姿まで印刷されていたのである。

ゼロが今まで戦ってきた相手に加え、怪獣墓場で見かけた宇宙怪獣、光の国で見た先頭記録の中に登場した侵略宇宙人。

それらが全体像に加え、スペックや出身星を含め何行か書かれているのである。

ゼロはゼロのページを開いた。

自分の姿を客観視するのは変な感じだが、鏡で見る姿と相違ない。

ゼロスラッガー、エメリウムスラッシュ、ワイドゼロショットという光線技の羅列。

ストロングコロナ、ルナミラクルというダイナとコスモスから受け取った力。

そしてバラージの盾を装備し、次元を超えることができるウルティメイトゼロの姿。

ベリアルとの一件から、自分の中に芽生えた究極の光「シャイニングウルトラマンゼロ」。

いつの間にか、ゼロは席を立ててその本に釘付けになっていた。

「どういうことだ!？」

「落ち着きたまえ、順に説明していこう」

寺島が静かに座るように促す。

ゼロが視線を感じ周りを見渡すと、店内の人間の視線がこちらに集まっていた。

「どうやら、少し力が入りすぎていたようである。」

周りの人間の視線を受けて、幾分か冷静さを取り戻したゼロが椅子に座りなおす。

寺島はゆつくりと、黒い液体をのどに入れていた。

グラスを再び置くと、

「結論から言うと、この世界にウルトラマンは存在しない」



多元宇宙論マルチバースという考え方がある。

現在、自分の所属している宇宙とは別の宇宙が複数存在しているという考え方だ。

詳しい説明は省くが、要はもしもの可能性を実現化した世界が、自分が生きているところとは別に存在するかもしれないという考えである。

世界と世界とを隔てている壁を突破し、別の宇宙に行くことは、基本的にできない。

だが時折、そのことを可能にする存在がまた、広い宇宙には存在する。

それらを称して、寺島は「特異点」と呼んだ。

次元を超越することのできるウルトラマンゼロも、その一人に数え

られるかもしれない。

彼に力を与えたノアの神は、寺島が知っている特異点の一つだ。特異点の形状は様々である。

ノアの神のように「人型」をしているものもあれば、怪獣墓場のように特定の「場所」を示すこともある。

次元を超えることのできる船もあるかもしれない。

とにかく、次元を超えることができる存在は限られており、特異点は皆さまざまの力を持っているものである。

実はウルトラマンゼロが世界を超えたことがあることは、一度ではない。

彼は何人も違う世界のウルトラマンと出会っている。

さらに、ウルトラマンがいない世界にも行ったことがある。

しかし、彼はその時までには知らなかった。

ウルトラマンの存在が、創作の中にしか存在しない世界のことを。

今回ゼロがやってきた世界は、そんな世界。



店の中に備え付けられた年代物のテレビから、ニュースが流れてくる。

『ウルトラマンは、本当にいたんです!!』

そんな言葉を、マイクを持った男が力強く話している姿が映っている。

その横には、スクリーンに映されたウルトラマンゼロと、バルタン星人の姿。

銀座で向かい合った姿を、どうやら撮影されていたようである。

「納得できたかね？」

「つまりは、ウルトラマンはおろか、他の宇宙人も存在しない宇宙だっ
てことだな？」

「そうだ。ちなみに、バルタン製の宇宙望遠鏡で、万年単位で宇宙を探

索したが、他の知的生命体の姿は終に発見することができなかった」
「それじゃあ、M78星雲の光の国は……」

「ない。バルタンの星も同じく」

先ほどまでは驚いていたが、マルチバース間を移動することができ
るゼロは、平常に戻りつつあった。

可能性の一つであるとして、何とか納得させようとする。

今開いているページには、ゼロに加えグレンファイヤー、ミラーナ
イト、ジャンボット、ジャンナインのチームであるウルティメイト
フォースゼロが、各々ポーズをとった姿で描かれていた。

こんな写真撮ってないぞと思いつつも、寺島の話聞く。

「……納得はできた。続きを話してくれ」

「それでは私自身の話をしようか。私の名はバルタン星人『テラー』。
地球では寺島隼魅と名乗っている」

「どうしてこの世界にいる？バルタン星が存在しないんだったら、お
前の宇宙は別にあるはずだ」

「いかにも。私がいた宇宙では、バルタンの星はすでに滅んでいる」

「だからこの世界に来て、地球を征服しようってか!？」

「話は最後まで聞きたまえ。第一、私は地球侵略などに興味はない」

その言葉を聞いて、ゼロが目を細めた。

「珍しいことを言うバルタン星人だな。——ならなぜこの世界に
やってきた？」

「先に言っておくが、私がこの地球にやってきて億の年月が経ってい
る。地球は地球人のものなどという陳腐な応答には応じる予定はな
い」

ゼロは目を見開いた。

自分は現在5900歳。しかし地球人で換算するとまだまだ若い
高校生ほどである。

それどころか、光の国の誰よりも年を経ているということになるで
はないか。

バルタン星人もそれほどの長寿ではない。

「……一体」

「私がこの世界にやってこれたのは、ただの偶然だ」

曰く、バルタンの星滅亡のきっかけである実験に巻き込まれ、気づいたらこの地球に転移していたという。

バルタンの宇宙船ごと転移したおかげで、地球に氷河期が起こり恐竜は絶滅してしまった。

食物を生産できないため、宇宙船内に備え付けられた冷凍スリープ装置で永い眠りつき、宇宙船の修理はナノマシンたちに任せていた。

再び起きたときには、人間たちが社会を作り出していた。

テラーは宇宙船を人間に見つからない場所に隠し、自らは人間の姿に化けて生活を行っているという。

何代もの代替わりを経て、現在は寺島を名乗っている。

「他の生き残った同朋たちがどうなっているか心配だったが、君の存在がその証明をしてくれたよ」

どこか暗い表情で、コーヒーの入ったグラスの表面に浮かんでいる水滴をなぞる。

バルタン20億3000万の生き残りは、もういないのだ。

どこかで、再び仲間に出会えることを夢見ていたのかもしれない。

「ウルトラマンを恨むつもりも、地球を侵略するつもりもない。私はこの地球で、人間として生きていくことを決めたのだ。そのためにも、バルタンの姿を隠し、地球人に化け、地球人と同じように物を食べ、仕事をし、法を守り、会話し、勉強している」

「ならなんで、あんたは姿を見せたんだ？」

テレビでは銀座に出現したバルタン星人テラーの姿が映されていた。

『バルタン星人の真意は？』

『地球侵略の前兆か？』

『ウルトラマンゼロと今どこに？』

そのような言葉が飛び出してくる。

寺島は無機質な目でその言葉を見ていた。

「バルタン星人はウルトラマンの敵だ。つまり悪であると見られている。ニュースでも、そんな話ばかりだな」

その言葉をこぼした寺島の横顔は、どこかもの悲しそうに見えた。「私の目的は一つだ。この星で生きて、この星でひっそりと息絶える。バルタン星人とはではなく、地球人として。……地球侵略など、ちゃんちやら可笑しい」

「……本意か？」

「疑うのも当然だ。私が嘘をついている可能性もあるからな。――」

「なら、もしも私が人類に牙をむいた時は、その時は――」
「その時は？」

――君の手で、私を裁いてほしい。



オレンジ色の陽が巨大な影をつくる夕暮れ、寺島とゼロは帰路についていた。

地球の夕暮れは美しい。

かつてメトロン星人が渴望したその光景を、二人は目に焼き付けていた。

バルタン星人テラーの処遇については、ゼロをして前例がないことだったため、光の国に相談に行くことにした。

彼の処遇については、彼自身が決めたことである。

バルタン星人としての姿を見せた以上、平穏な日常はもうやってこない。

何かしら人間に、テラー自身にも影響を与えることだろう。

彼は光の国から監視をつけてほしいとゼロに言った。

バルタンの生き残りではなく、地球育ちの宇宙人として生きていくためにも、信用を勝ち取りたい。

侵略宇宙人にはなりたくない、彼は言った。

厳しい、強い決意を宿していた。

もし彼がゼロとの約束を破った、その時は地球人の前で、バルタン星人の姿となって死ぬ。

悪のバルタン星人の一員として、一生を終える。

そう言った彼の頬に、一筋の涙が通った。

「悪いな、ここまで送ってもらって」

夕闇の公園、ゼロと寺島が相對する。

ゼロが連続で次元移動を行うためには、間に休憩を挟まなくてはならない。

喫茶店で時間をつぶしている間に、彼の次元へのエネルギーが貯まっていたようである。

辺りに人気がない夜の公園で、ウルトラマンゼロとバルタン星人の姿となる。

ゼロがブレスレットを変形させ、ウルティメイトイーゼスを装備する。

「じゃあな、バルタン星人テラー」

「その名を呼ばれるのも最後かな、ウルトラマンゼロ」

二人は顔を見合わせ、笑いあった。

やがてゼロは次元の彼方に消えていき、姿を消した。

残った寺島はしばらくの間ゼロが消えた空を見上げて、やがて家路についた。

代り映えないであろう平穏な日常に、戻っていった。

第三話 現状

「銀座事件」から数日後。

世間では皆、突然現れた「未知」に対して沸き上がっていた。

異世界からの侵略者。

おそらく一番著名であるだろう宇宙人。

そして光の国の戦士。

とある動画サイトに投稿された銀座事件の映像は、一日で何十万再生もの記録をたたき出したという。

日本国のやらせではないかとの声も上がったことがある。

しかし、別のアングルから撮影された映像は、何百も別のアカウン
トで投稿され、実際に銀座には大きな傷跡が残されているのだ。

そのリアリティ及び事実関係は、安易なCGによる合成ではないこ
とを物語っていた。

そして、今だ消えることなくつながっている『^{ゲート}門』。

「門」周辺は現在、政府の命によつて立ち入り禁止区域に指定されて
おり、人々は遠目から撮影されたその映像を眺めるだけでしか、門に
対しての情報を仕入れることができなかった。

国会議事堂では、緊急特別国会が組織され、銀座事件の全貌、及び
その始末をどうするのかについて議論を繰り広げている。

人々の今一番の関心も、異世界への「門」及び宇宙人に向いている
ことだろう。

特に、ウルトラマン及びバルタン星人に対する反応がすさまじい。
連日どの新聞も一面を飾るウルトラマンゼロとバルタン星人の姿。
ウルトラシリーズを公式配信しているバンダイチャンネルでは、加
入者が爆発的に増えたとの報告があった。

テレビ上では、ウルトラシリーズの再放送、または歴代のバルタン
星人回を編集したものを流すのが、どのチャンネルでも行われてい

た。

ウルトラシリーズの、特にウルトラマンゼロとバルタン星人のソフビは売れに売れ、おもちゃ屋から姿が消え去り、ネット上ではプレミアがつくほどであった。

「門」に関する話題も確かに存在する。

しかしそれを押しつけて世間の話題をさらっているウルトラマン達は、やはり人々の間で爆発的な人気を誇っている証なのだろう。

さて、空に消えていったウルトラマンゼロとバルタン星人の姿は、今のところ確認されていない。

はるか上空にて姿を消した二人の巨人がどこに行ったのかについては、憶測が憶測を呼んで、テレビでも、ネットでも、日常でも議論されている。

『ウルトラマンゼロがすでに倒した』

『今もなお、宇宙のどこかで戦っている』

『バルタンは逃亡し、地球人に化けて隠れて暮らしている』

『ウルトラマンは敗北し、バルタン星人も大きな傷を負ったために今癒しているところだ』

面白いのは、必ずウルトラマンが勝つと言わない人がいることだろう。

ネット上に投稿された動画を見た人の中に、バルタン星人が銀座で引き起こした現象に心当たりがあった者たちがいたのだ。

『ウルトラマンマックス』に登場する、ダークバルタンという個体である。

「最強、最速」がキャッチコピーのウルトラマンマックスは、まさしく「最強、最速」を冠するにふさわしい強さを持つウルトラマンだったが、彼の敵もまた強大な力を持っていたのだった。

数いる怪獣の中でも、マックスのバルタン星人回は特に印象深い。ダークバルタンはその卓越した科学力をもって、一度はマックスを打倒し、続く再戦でさえ、マックス単体での打倒は終にかなわなかったのである。

ネット上では、歴代最強の恐るべき力を持つバルタン星人として恐

れられている。

そして先日銀座に出現したバルタン星人テラーは、その体色とも相まってダークバルタンと同個体、もしくはそれに似た個体ではないかとの噂が飛び交っているのである。

そして、ウルトラマンの弱点が光エネルギーの低下によるものだとしたら、ダークバルタンは強敵である。

また、時空を超えてやって来たウルトラマンゼロも、議論に活性を与えざる要因となっていた。

ウルトラマンゼロに対する世間の印象は、一言でいえば強いことである。

映像内で注意深く見たところ、彼は「バラージの盾」、つまりはウルティメイトイージスを身につけていた。

ウルティメイトイージスは鎧や楯だけでなく、一撃必殺の武器ともなりうる。

最強の矛と楯とを持ち合わせる若き最強戦士とのカードに、人々は予測がつかないでいるのだ。

そして何よりも若い故の成長進度、及び彼が持つ不屈の闘志が、人々に可能性をもたらす。

きっとゼロならば、ダークバルタンすら打倒してくれるだろうという可能性を。

人々は今マヒしていた。

フィクション

創作の世界の住人が、次元の壁を越えて現実に現れたことで、夢に浸っていたのである。

異世界からの侵略者や巨大化する宇宙人は、まぎれもなく現実の脅威として具現化したものだということに。

「銀座事件」も「バルタン星人」も、人間にあだなす悪意となりうるかもしれないというのに。

◇

伊丹は異世界に架設された自衛隊の駐屯地で、日本から持ち込まれ

た食料に口をつけていた。

今日のメニューはカレーである。

野菜がたっぷりと煮込まれた、栄養価の高いものだった。

「門」が現れて数日間、盛り上がる世間とは裏腹に、自衛隊は戦っていた。

バルタン星人が引き起こした反重力現象の影響で大した犠牲を払うことなく大量の捕虜を手に入れることができた。

しかし、依然として開いたままの「門」からは、次々と後続の異世界からの侵略者が入ってくる。

市民の平和を確保するためにも、自衛隊は異世界に入ることを決定した。

内閣総理大臣からの命により、異世界の「門」が置かれているアルヌス周辺に仮設基地を作り、そこから侵略者たちを迎え撃ったのである。

敵の戦力は前時代的なもので、鎧をまとい剣を振り回し、馬で駆けてくるといったものだった。

対して自衛隊は新式の長銃など火薬兵器にて、遠方から火の雨を敵に対して降らせた。

結果、侵略者たちはなすすべもなくその身を骸に変えたのである。

もちろん、これで終わったわけではないことはわかっている。

時の首相である北条重則は、異世界を日本国領の特別区と認定。

事態の収束を図るためにも、自衛隊を送り出すことを決定したのである。

敵は数を率いて再びアルヌスにやってきた。

前近代時代の戦ならば、戦いは数というふうに決まっていたため、明確な脅威となったであろう。

しかし、近代の火薬兵器を持ち込んだ日本軍は、瞬く間に異世界の軍隊を壊滅させてしまったのである。

捕虜から、侵攻してきたのは帝国と呼ばれる国であることを聞き出した日本国は、報いを受けさせるために直ちに自衛隊を派遣したのである。

その部隊の中に、銀座事件にて英雄となった伊丹耀司の姿もあった。

警官や民間人と協力して皇居に籠城し、侵略者たちと戦った彼の功績は評され、二階級特進した。

あれよあれよという間に、自衛隊の異世界派遣が決まり、伊丹もその部隊の中に組み込まれることとなったのである。

何でこうなっちゃったのかと、本気で頭を抱える伊丹の眼前で、倉田三等陸曹が同じようにカレーが盛られた皿をテーブルの上に置いた。

「しっかし、凄いことになっちゃいましたね。まじでファンタジーの世界に来ちゃったとか……」

「俺としては、フィクションはフィクション、現実には現実のままがよかったけどな」

「何言ってるんですか、ファンタジーですよ！ファンタジー！エルフにドワーフに獣人に魔法に妖精。漫画や小説の中でしか存在しなかったあんな存在やこんな存在が！くう、俺、めっちゃ楽しみますよ！」

「君は毎日が幸せそうでいいなあ」

倉田は北海道の名寄駐屯地から派遣されてきた21歳のまだ若い隊員だ。

伊丹が上下関係についてはとかく厳しくは言わないことを悟ると、こうして気軽に話しかけてくるようになった。

倉田もアニメやゲームといったサブカルチャーが好きであり、オタクである伊丹とは話もウマもあった。

現在、敵軍が壊滅しその報告を上のお偉方に行っている最中であり、現地に派遣された自衛隊員にとって束の間の休息となっている。

「それにしても、伊丹二尉はウルトラマンとバルタン星人を生で見る事ができたんですね？」

「ああ」

「いいなあ、俺も生ウルトラマンを見たかったっすよ!!」

どうでした、どうでしたと当時の様子を尋ねてくる倉田をいなしな

がら、伊丹は回想する。

伊丹は一般に特撮オタと呼ばれるようなオタクではない。

しかしウルトラシリーズの何作かは子どもものころに見たことがあったり、動画サイトでバルタン星人回だけを編集した動画を見たことはある。

男としては、ウルトラマンは義務教育。

その上で、銀座事件当時のことを思い出す。

—— 桁が違う。

彼が自衛官という、国家の安全保障を担う、武力に携わる仕事に就いていたこともあるかもしれないが、それでも生のバルタン星人は、もの凄いものだった。

皇居に避難した民間人と共に遠目からその光景を眺めていたが、伊丹には後ろで写真を撮っていた民間人と同じ楽観視することはできなかった。

個体としての戦力差がありすぎる。

仮に自衛隊がバルタン星人と戦ったとして、勝てるのだろうか？

いや、人類が全戦力をかけて打倒することが必要となる相手だろう。

しかも今回現れたのは一人だったが、もしも数が多かつたらどうなることか。

絶望的だ。

テレビのように、ウルトラ警備隊なる科学特捜隊はこの世に存在しない。

だから伊丹は、空の裂け目からウルトラマンが現れたときには安堵のため息をついた。

助かったと、心の底から思ったのである。

それからいろいろあつて、あれよあれよと異世界にいる。

自衛隊の部隊は二つに分けられ、異世界へと赴く舞台と、再びバルタン星人がやってたところへ迎え撃つ部隊とで地球と異世界——
—— 特地と名付けられた世界を行ったり来たりしている。

さすがに自衛隊はプロであり、相手の戦力を過小評価したりしな

い。

特地に派遣される部隊よりも、日本に残る部隊の方が目が血走っていたことを覚えている。

伊丹も、特地に派遣されることが決まった時は、不謹慎だがほっと息をついたのである。

幸い、まだ再びバルタン星人が日本に現れることはなかった。

バルタン星人、及び現れる可能性のある他の侵略宇宙人に関しては、日本の国防だけではおさまりがつかない事態であるので、近々国連で話し合いが行われるそうである。

現在国会では、ウルトラマンの第二話を視聴しながらあーだこーだ話し合っているのだそうだ。それも真剣に。

普段なら笑い飛ばせるようなことだろうが、今はそんなことも言ってもらえない事態なのである。

日本は、良くも悪くも平和な期間が長かった。

それはそれですばらしいことなのだろうが、悪く言えば危機感が薄いのである。

世間ではウルトラマン及びバルタン星人を受け入れるような報道をしている。

仮にバルタンが侵略してきても、再びウルトラマンが助けてくれるだろうという確信を持っていた。

しかし、自衛隊など国防に携わる人間からすると、ウルトラマンが助けてくれることなどという不確定要素に任せるわけにはいかないのだ。

巨人および怪獣が現れたとしてその時市民を誘導するためにはどうしたらよいか。

被害を抑えるためには、どれほどの軍備が必要になるか。

敵は創フィクション作の中の住人なのである。

設定がどれほど合致するのかわからないが、戦闘を想定するためにはそのデータを信用しなければならぬのだ。

伊丹は、バルタン星人は嫌いではなかった。

有名だし、造形もインパクトがある。

それでも、仮に自分が戦うことになるかもしれない相手に対して、情を抱くわけにはいかなかった。

だから、眼前で喜ぶ倉田の言葉に対しては、同意をすることができなかつたのである。



寺島は自分の住んでいる古いアパートの中で、一人テレビを見ていた。

映像で映されているのは、「門」の姿だ。

現在自衛隊によって辺りを封鎖され、「門」自体もビニールシートなどをかぶされて隠匿されてある。

その光景を、ヘリコプターから撮影し、アナウンサーが解説しているのだ。

細められた寺島の目は、その光景を射抜いていた。

「門」の存在について、寺島が知つたのはゼロが自分の宇宙に帰ってからである。

テレビでも新聞でも、ネット上にもその存在を確認する手段があふれていた。

もしもの時のためにも、彼は情報を収集して数日、違和感を覚えた。なぜ、次元のつながりが閉じないのか。

怪獣墓場のように、マルチバースすべてにつながっている特殊な場所もある。

しかしそこは不思議な力によってあふれており、ありていえば危険な場所なのだ。

また、ゼロやノアの神のように一時的に次元を超越することができる存在もあるが、それも一時的なものである。

ずっと異なる次元をつなげていることなど、できるものなのか？
仮にできたとしても、膨大なエネルギーが必要なはずである。

それをまかなうだけのエネルギー、及び回廊を安定させるための装置が、エネルギーに耐えきれぬのか。

かつて科学者として生きたバルタンの知識が、「門」の危険性について明確に答えをたたき出してくる。

そして湧き出す、好奇心。

いや、知識欲ともいべきものだ。

これまで眠っていたそれらの感情が、寺島の中にむくむくと沸き上がってくる。

彼の頭にいくつも浮かんでは消える仮説。

しかし仮説は仮説でしかない。

証明するためには、

その日、一人の人間が数日間、地球から姿を消した。

誰にも悟られず、何にも記録されずにバルタン星人テラーは、特地の大地に降り立ったのであった。

第四話 逃亡

家出をした。

デシは現在数えで6歳になる。

もうすぐ父親と共に狩りに出かけることになるし、母の手伝いで、家事をしなければならぬ。

それはほんの少しの、幼い心だった。

妹のミリはまだ3歳の赤子であり、母は手のかかる妹に夢中だった。

村の若い者たちと共に朝から出かけて行って、日が暮れてから帰ってくる父とは最近一緒に遊んではもらえない。

デシは不満だった。

父もこの間までは、一緒に遊んでくれていたのだ。

母も、妹と同じように自分の相手をしてくれていた。

しかし彼を取り巻く環境は変わってしまった。

もう一人立ちするための年齢だとしても、子どもからすればそんなことは関係がないのだ。

自立するために必要なことだとしても、幼いデシの理性までには届かなかった。

だから、両親の気を引きたくて、妹のデシにちよっかいをかけたのである。

ミリは大きな声を上げて泣き叫んでいる。

父は怒った。母も怒っていた。

デシにとつては、自分にかまってほしかっただけなのだ。

それなのに、両親二人ともが自分に怒ってくる。

デシは目から涙を流して家を飛び出した。

背後から父の声が聞こえてきた気もするが、彼の意識までには届か

なかった。

デシがいたのは、普段彼が遊び場として利用している林である。林の中に何かをくりぬいたような穴があり、子どもが一人入れるような大きさだった。

小柄なデシは、穴の近くに周りから拾ってきた大き目の石などを置くことで、一種の秘密基地として利用していた。

穴の中に閉じこもって泣いていたデシは、遠くで自分のことを呼ぶ父の声を聞いていた。

彼の理不尽な怒りは、父の声が遠くなるまで収まることになかった。

やがて辺りが陽が落ちてくるころ、夕暮れの闇につつまれながら、デシは穴から這い出してきた。

頬にはいく筋の涙の跡があり、泣きはらした眼は赤かった。

鼻をすすりながらも、普段の帰り道に戻っていく。

父や母は、自分のことが嫌いなのだろうか。

彼は子どもながら憂鬱だった。

とぼとぼと肩を落として、帰路につく。

小さなデシの体を覆うような木々の林を抜けたとき、デシは思わず声を漏らした。

「……え？」

村からは黒い煙が上がっていた。

立ち並んでいた家、家は燃え、いくつかは取り壊されていたりもした。

弓や剣がそこらじゅうに散乱し、生臭い赤い液体がそこらを濡らしていた。

どうして気づかなかったのだろう。

そんなことも考えられずに、デシは駆け出した。

裸足で石が食い込むのにも構わずに、デシは自分の両親とともに住んでいた家の方角を目指す。

家は、踏みつぶされていた。

折れ曲がった木々や、ぼろぼろになった扉など、誰がどうみても廃

壚としかみえないよな有様だった。

家の前には、一本の剣が落ちていた。

血の付いたその剣は、父の使っていたものだった。

呆然としながらも、その剣を拾い上げる。

父からは、まだ早いと言われていた。

その言葉に反発し、一度持つてみたことがある。

重かった。

命を奪う、鋼の重みに耐えきれず、落としてしまったことがある。

父はそれを見て笑っていた。

その父の姿を見て、デシは頬を膨らませて憤慨した。

そんな記憶が、次々と頭の中を過ぎ去っていく。

何か熱い、我慢できないものが胸の内から込みでてきた。

それは喉を通って、自然と口から出ていく。

デシは大きな声を上げて泣いた。

視界が曇るほど大粒の涙を流して、父の剣を握りしめながら。

やがて後ろに何か大きなモノが降り立った音と、生臭い匂いがデシ

のところにもで届いてきた。

グルルという、恐ろしいうなり声も聞こえてくる。

恐る恐るデシは振り返った。

そこにはデシの何倍もの大きさを備えた、竜の姿が。

おとぎ話でしか聞かないような存在に、デシは泣くのも忘れて立ち

尽くした。

竜はデシを見て嬉しそうに一鳴きすると、牙が並んだ大きな口を広

げた。

デシを一飲みできそうなほど大きな口であった。

デシはたまらずに目を閉じた。

痛いのか、苦しいのか。

それすらわからないまま、彼は竜の獲物に選ばれたのだった。

デシは覚悟した。

今、ここで自分は食べられてしまうのである。

しかしどうしたことだろうか。

予想していた痛い、苦しいモノがこないのである。

デシは恐る恐る目を開いていく。

薄めに見えるのは、小さな小さな、デシの掌にも収まりそうな小さな赤い塊。

よく見るとそれは、四方を囲んだ透明な壁の中に閉じ込められている。

そこから逃げ出そうと、何度も何度も体を打ち付けている。

しかし、情けない音を出すのみで、透明な壁を壊すことは叶わない。

ふと、デシのすぐ隣で気配を感じた。

大きな気配だ。

成人男性ほどの大きさである。

デシはそちらに視線を向けた。

彼が最初に見たのは、何やら黒っぽい灰色のような体躯。

デシの頭よりも大きい、二つの大きな鋏。

そして、暗闇の中でも輝きを放っている二つの大きな眼。

デシはその異形を見て、静かに尻を地面に押し付けた。

彼の腰は、先ほどまでの竜と目の前の異形とでとつくの前に抜けていたのである。

目を見開き、開いた口から声が出ぬまま、デシは異形の方を見る。

異形はデシから壁に囲まれた小さな竜に目を向けると、そちらに近寄っていく。

透明な壁は、どうやら瓶——これは後程わかったことではある

のだが——のようなものであるらしく、それを大きな鋏で器用に挟んで、眼前に持ち上げる。

そして低い、響くような声で笑ったのだ。

フォツフォツフォツフォ。

デシの口が引きつった。

彼が生きてきた中で、このような化物には会ったことがなかったし、両親が話してくれる物語にも出てこなかった。

デシは恐ろしかった。

先ほどの巨大だった竜とは、次元の違う怖さを感じていた。

それは何かよくわからない、理解できないものに遭遇したときの恐怖感に似ていた。

化物は振り返って、こちらの方に歩いてくる。
いやだ、こないで。

必死になつて、石のように重くなつた身体を動かす。
水の中でもがいているようだった。

デシの奮闘もむなしく、異形は顔をこちらに近づけてきた。
あの大きな黄色の目、そして人種とは違つた生物の顔。

幼いデシがこれ以上耐えられるはずもなく、張つた糸切れた彼の意識は闇の中へと落ちていった。



デシが目をさました場所は、大きな背中の上だった。

「父ちゃん？」

「おう、目が覚めたか」

彼がよく知っている、父の声だった。

デシは父に背負われて、移動していたのだ。

唐突に涙がデシの目からあふれてきた。

彼は我慢することなく、その大きな背中に縋りついた。

父ちゃん、父ちゃんと声を上げて泣いた。

生きていた。

あの光景は夢だったのだ。

自分が見ていた、都合の悪い夢だったのだ。

父は黙して、息子の泣き声を聞いていた。

しばらくしてデシが鳴き疲れ、冷静になつたころ。

周りの様子がおかしいことに気が付いた。

「父ちゃん、どこ行くの？」

父はデシを背負つたまま、どこか知らない場所を歩いていた。

辺りは依然として暗いままである。

闇の中を足元に注視し、ゆつくりと進んでいく。

「ねえ、どこに行くの？家に帰るんじゃないの？」

ふと、父が腰を下ろし、背負っていたデシを下ろした。

そして改めて向き直り、デシに視線を合わせる。

デシの腕に、その大きな掌で掴んだ。

デシ、と低い声がした。

「よく聞くんだ」

いつになく、彼の口調が固いことに違和感を覚える。

朝に喧嘩した際の怒りからではない、もつと大きな緊張からくるものだと、幼いままデシは理解した。

「村は、もうない」

彼にはそれは、到底受け入れがたい事実だった。

父の体にはいくつもの傷あとが見られ、ところどころに止血した後が見て取れた。

そして理解するのだ。あの悪夢は、現実だったのだと。

聞くんだ、そう力強い声がデシを叱責する。

「これから俺は、母さんとミリを探さなければならない。デシ、お前はもう一人前だ。一人前の大人にならなければならないんだ。わかるか？」

わからない、わからなかった。彼には。

それでも、父は言葉をつづける。

「これからはお前の知らない人とも、見たこともない人が住んでいる場所にも行かなければならない。その時に、デシのことに構っている暇がないかもしれん。時には、一人で留守番を頼むことだって考えられる。それでも、いい子にできるか？」

幼いデシには、その注文は大きすぎた。

無理だよと、力なく首をふる。

「やるんだ、デシ。できないと言ってられないんだ。……もう少し甘やかしてあげたかったが、そうも言ってられなくなってしまった。はぐれた母さんや妹の無事を確認して、一緒に帰るためには、デシの力が必要なんだ！」

父が腕をつかむ力が強まった。

「……俺も、……俺もいっぱいいっぱいなんだ。……わかってくれ、デシ」

デシは力なくうなだれた父の姿を見た。

彼は一度も、このような弱い父の姿を見たことがなかった。

いつもの強い、ヒーローのような父とは正反対の、頼りなく小さな父だった。

父は体を起こすと、デシの手をつないで歩き出す。

デシは無言で、その後につき添っていった。

辺りは月明りに照らされたまま、沈黙が支配していた。



デシが父と歩いて数刻、途中で休憩を挟みながらも一行は明け方、人の列を見つけた。

彼らは荷台にそれぞれの家具などを備えて、移動している。

それはただの引越などではない。

彼らもまた、竜に故郷を追われた人々なのだ。

人の列の中へと、デシたちは入っていく。

一同ともに、足取りには力がなかった。

「……父ちゃん、足が痛いよ」

デシはそこで初めて、口を開いた。

デシの顔には疲労の色が色濃く見て取れた。

足も裸足でここまで歩いてきたからか、いくつも擦り傷を作ってロボロである。

デシの父は列から一度出て、彼を背に背負った。

そして再び、力なく行進する列の中へと入っていく。

昇る日、照らす太陽。

そしてあてもない行進が、彼らの体力と気力を奪っていく。

デシは我慢をしていた。

父を困らせてはいけないと、彼なりに理解していたのだろう。のどがかわいたことも。

お腹がすいたことも。

眠いことも。

痛いことも。

しかし、彼の正直な部分が、わかりやすく空腹を主張していた。

「腹減ったか？」

小さくデシはうなづいた。

デシの父であるヨタは困っていた。

できることなら、息子に何か食べさせてあげたい。

もしくは水を飲ませてやりたい。

しかし、裸一貫で村から逃げてきたこの身には、何も身につけていなかった。

一緒に行進している人々からは、支援をもらえないであろうことは明白だ。

彼らもまた、自分のことで必死なのだ。

無理を通せば、争いに発展する。

現に先ほどから、後続の方でいさかいの怒声が聞こえてくる。

下手をすれば、殺し合いにまで発展してしまう。

彼もそれだけは避けたかった。

彼は視線をあげ、辺りを見渡した。

ふと、彼をして奇妙に思えるものを見つけた。

それは緑色の、鉄の箱のようなものだった。

大きな黒い車輪がつけられ、それが動いている。

速度はそれほど速くはないように見える。

いや、箱の中に見える人々の顔からは、この行進の速度に合わせているようにも見て取れた。

ヨタはひよこひよここと緑色の箱に近づいていった。

箱は大きなものだった。

ヨタの身長よりも大きく、横に幅がある。

その箱が、なんとも滑らかに動いているのである。

ヨタが近寄ってくるのを気づいた箱の中にいた人が、外に出てくる。

全身を緑と黒の、縞々のような、混ぜ合わせたような模様をもった女だった。

身長も大きい。

ヨタの身長は180センチ超。そのよりも頭一つぬけているように見える。

「○△□×」

女はこちらにむけて何かを発信するが、何を言っているのかヨタには理解ができなかった。

「この子を少し預かってもらえないか？」

女はヨタが言った言葉を理解できないようだった。

何かを伝えようと身振りを加えてくる。

ヨタは背負っていたデシを緑色の女に差し出すと、人差し指で自分の方を指さし、次に女の方を指さした。

そして何かを飲む身振りをすると、外の世界へと視線をやった。

まだ女は理解できていないようだったが、ヨタは無理やり女にデシを押し付けた。

女は抗議するような視線を送ってきたが、デシが衰弱している状態を見て、急いで緑色の箱の中へと戻っていった。

ヨタはそれを見送ると、列から飛び出し、近くの森の中へと重い足を運んでいった。



デシは何か、温かいものにくるまれていることを自覚した。

父の背に背負われ、半分夢の世界へと旅立っていた彼は、いつの間にか横になっていた。

ぼやける視界の中には、何やら緑色のものが見える。

横になって眠っていると、先ほどまでの足の痛みが嘘のように良くなってくるようだった。

緑色が何か言っているように感じたが、それよりも早くに彼は夢の世界へと旅立っていった。

黒川は先ほど眠りについた子どもを横目に、助手席に座った伊丹に視線を投げかける。

「どうよ、その子?」

「今眠りにつきました。かなり衰弱していましたが、ひとまずは大丈夫なはずです」

「そっか、クロちゃんが言うなら安心かな」

黒川茉莉は自衛官ではあるが、看護師の資格も持っている。一通りの応急処置を施し、デシは安らかな寝顔を見せて眠りについた。

最初いきなり彼の親と思わしき人物から押し付けられたときは、一言怒鳴ってやりたかったが、彼はそのまま森の中へと姿を眩ました。デシの様子もあって、そのまま車の中へと連れ込み、以前訪れた村で拾ったエルフの娘の隣に寝かせているのである。

荷物が増えたというふうにとらえられるかもしれないが、それでも彼女たちには見捨てることができなかった。

子どもに罪はない。

彼が安らかな寝息を立てて眠っている幼い顔を見ると、そう思える。

「で、おとつつあんはどこに行ったのかな?」

「何かを飲むようなしぐさをしていたので、水でも汲みに行ったのかと。……彼、何も持っていませんでしたから」

「この子以外?」

「この子以外です」

「門」を超えてやってきた自衛隊は、以前訪れた集落から、赤いトカゲのようなドラゴンが各地を襲っていることを知っていた。

今眠っているまだ幼い男の子も、その被害者の一人なのだろう。

炎龍には勝てない。

彼らはそのことを以前訪れた村で聞いている。

人知を超えた災害。

人が起こすアクションは、二種類ある。

立ち向かうか、逃げるか。

彼らは逃げることを選んだ。

そうして、どこに行くかもわからないキャラバンの行進を行っているのだった。

黒川は再び、眠っているデシの方を見る。

こんな幼い子にも、神は試練を与えるのだ。

自分は、一体何ができるのだろうか。

そして黒川の頭を占めているもう一つの疑問。

それは先ほど自分に自分の子どもを押し付けてきた、デシの父親のこと。

医療系の知識を持つ黒川には、彼の体に見える傷跡からは、絶命しているもおかしくないように見えた。

彼を一目見たとき、悲鳴が出るのをなんとか抑えることに苦勞するほどののだ。

カピカピに乾いた黒い血痕から、大量の血液が流れ出たことがわかる。

それを、まるで何事もなかったかのように動いている彼は、一体何者なのか。

本当ならば、彼にも治療を行うことが必要だったはずなのに、彼に子どもを押し付けられているうちにあれよあれよと姿を消してしまった。

彼女はファンタジーというか、フィクションにそれほど精通しているわけではない。

だから、常識はずれのことにも、いちいち理的に理解しようとしてしまうくせがあった。

これが伊丹だったら、『ファンタジー』の一言でひとまず納得させることができたろう。

しかし、実直で、悪く言えば融通の利かない彼女には、得体のしれない存在として、ヨタの姿が記憶されたのだった。

第五話 兇覺

地球において、「竜」は東西問わず、広範囲に分布して存在している。漢書においては、竜は様々な動物の部位の合成キメラとしての形を形容してある一節が存在する。

頭は駱駝に似る。

角は鹿に似る。

目は鬼に似る。

耳は牛に似る。

項うなじは蛇に似る。

腹は蜃みずちに似る。

鱗は鯉に似る。

爪は鷹に似る。

掌は虎に似る。

東洋、西洋合わせて伝えられている竜の姿は、様々であるものの、そのほとんどがこのようなキメラ型になっているのに異論を唱える者はおるまい。

そして、竜を爬虫類足らしめる最大の要素として、蛇が挙げられる。

蛇のように長い体躯に、もろもろの要素を取り付けたものが、竜としての姿なのである。

どうして蛇が取り入れられたのか、それは不明である。

世界最古の竜といえば、古代バビロニアの創世神話に登場するマルドゥク神に討伐され、天地創造の礎となった水神ティアマトだろうか。

はるか古代においては、人間にとって蛇は聖にも邪ともなる存在だったのだろう。

そして中世、近世を経て現代にいたるまで、蛇の体躯にさまざまな動物の脅威を集め、具現化したものが「竜」なのである。

「竜」はそのほとんどが絶対的な力の持ち主として描かれる。人間よりもはるかに大きな体躯、天候を操り、厄災を生み出す権能。そしてその悪役としての顔は、みごと討滅せしめた人物の威光を示すのにぴったりのものである。

何が言いたいかというと、そんな恐ろしい「竜」に、伊丹たち自衛隊は今追い回されていたのである。

日がまだ天高く昇る時間、遠くに見える山々のはるか向こう側から、赤い悪魔はやってきた。

古代龍に分類される炎龍は、巨大な体躯を維持するために長い間休眠している。

そしていざ起きると、活動するための大量のエネルギーを摂取するために、動物を襲い、その血肉を糧とするのである。

人間は竜にとって、格好のエサなのだろう。

コダ村の住民は、近隣の村が炎龍に襲われたとの報告を受け、ただちに避難を開始した。

彼らを作るキャラバンは、各地から避難してきた他の村の住民たちが合流し長蛇の列を作っていた。

人の波を横目に、伊丹たち自衛隊も車に乗って走っていたのである。

彼らが行軍するスピードは遅く、AT車のクリープ現象を利用してのろのろと走っていたところを、襲ってきたのであった。

赤い龍の片目には、矢による傷があった。

炎龍がエサを探す中、コダ村を含む住民たちが避難し住居を放棄したために、ここまでエサを求めてやって来たのである。

炎龍の咆哮が天に轟き、人々が混乱する中、自衛隊も行動を開始する。

車から轟音が響き渡り、先ほどの何倍ものスピードを伴って発進、竜の周囲でかく乱する。

彼らが今回特地に持ち込んだ火器は、主に六四小銃。

12.7mmの銃弾が炎龍の身体に当たり、火花を散らした。

しかし、絶対者として君臨する炎龍の装甲は厚く、期待していたよ

うな戦果は得られなかった。

かの全身を覆っている鱗は固く、銃弾をはじく。

かの大きな口から放たれる炎はすさまじく、十分な距離をとって回避したとしてもその熱気を感じ取ることができない。

かの巨大な体躯に似合った剛爪は、大地をうがち、天を割く。

異世界を相手にして圧倒的な技術を持つ日本の自衛隊からしても、こんなものだろうと言わしめるような存在だった。

まさしく、絶対者であった。

それでも、炎龍に対して自衛隊は自らの牙を突き立てていく。

満足なダメージが与えられないとしても、牽制の意味合いを込めた銃弾が、先ほどから雨のように炎龍に殺到している。

その銃弾の雨を、炎龍は煩わしそうに装甲を持って受ける。

蚊に刺されたようなダメージであったとしても、休みなく浴びせられる攻撃に、うんざりしたように尾を振り回す。

自衛隊と炎龍、ともにスピードを出すことができる手段を持っているが、有利なのは圧倒的に炎龍だった。

かの翼をもって、空を悠遊と飛ぶことのできる炎龍に対して、自衛隊はトラックで地面を這いずり回ることしかできない。

弾丸の雨が、炎龍の頭部に集中される。

それを嫌がって、炎龍が空に逃げる。

先ほどから彼らの特大の火力をお見舞いするために隙を伺っているのだが、巨体に似合わぬ俊敏さと、空を飛ぶことのできる炎龍の機動力に圧倒されて、狙いを定めることができなかった。

ましてや、彼らは常に動き続けていかなければならない。

炎龍がいつまた、炎を吐き、爪を立ててくるかわからないのだから。

ある自衛隊員の口から舌打ちが聞こえてきた。

千日手、いやこちらの燃料が切れるのが先か。

このまま迎撃を続けていても、こちらが不利となることは明白である。

どこかで、明確な隙を見せてはくれないものか……。

祈りか、願いか、彼らのそんな思いが届いたのか、炎龍がふと、動

きを止めた。

空を滑空していた炎龍が突然鳴き声を上げると、そのまま地面に向かって墜落していったのである。

大きな砂ぼこりをたて、巨体が墮ちる。

地についてからも、もがき苦しむように全身をしきりに動かしていた。

妙にも思ったが、千載一遇のチャンスである。

「後方の安全確認！」

体に染みついた普段の訓練通りに、パンツァーフアウストが発射される。

どこか目の前で見ている光景がスローに見えてくる。

土煙を立ててもがき苦しんでいる炎龍に対して、ゆつくりと近づいていく超威力の弾頭。

それはそのまま、炎龍の左肩辺りに着弾、爆発。

爆発で肩の鱗や肉をえぐり取られた炎龍はたまらず、空の彼方へと去っていく。

豆つぶよりも炎龍の影が小さくなるのを見届けると、自衛隊員たちはほっと一息ついた。

彼らは一先ずではあるが、絶対者を退けることができたのである。周りの人間が沸いた。



『デシ!!』

人の壁を押しわけ、自衛隊のトラックの方へと走ってくる男がいた。

ヨタであった。

幾分汚れを落としたらしい彼は、これまた良い顔色を取り戻した息子のもとへと戻って来たのである。

『父ちゃん!』

先ほどまでトラック内で寝かされていたデシは、その中で緑色の

人々が、炎龍を撃退する姿を見ていた。

パンツァーファウストが炎龍の左肩に着弾し、逃げていく炎龍を姿を見送るまで、彼の震えは止まることを知らなかった。

彼のとなりには、父の姿はなかった。

周りでせわしなく動き、声を放っている自衛官の姿はあつたが、彼は一人だったのである。

彼にとっては、それは永遠にも等しく感じられた時間だった。

ようやくその地獄から抜け出すことができた彼は、父の足元に抱き着いて大声をあげて泣いていた。

ヨタは泣き叫ぶ息子を抱きかかえると、トラックから出てくる自衛官の方に歩み寄っていく。

『すまない、息子が世話になった』

「……えーつと、『こんにちは』」

『君たちには返しきれないほどの恩がある。何か俺に手伝えることがあれば、何でも言ってくれ！』

「……だめだ、言ってることわかんねえ」

まだ特地の言葉を学び始めた伊丹にとって、ヨタが話しかけてくる言葉は難しすぎた。

しかし、どうやら好意的な態度ではあるらしい。

顔を見ても、喜びや嬉しさであふれていることから、息子が助かったことに対して礼を言いたいのだろう。

伊丹はそう推測した。あながち間違えでもなかった。

ヨタは右手を差し出した。

親愛の握手だ。

異世界にもそのような風習があるのかと、伊丹も右手を差し出す。力強く、伊丹の手が握られる。

でかくてざらざらした手だった。

『ねーえ、ちよつといいっ？』

彼らの間に入って来たのは、黒のゴスロリだった。

白い意匠をこらしたハルバードを担いだ彼女は、伊丹とヨタの方へと近づいていき、そう言った。

『……これは、もしやエムロイの神官であらせられる、ロウリイ・マーキュリー聖下ですか？』

『ええ、そうよお』

『お会いできて光栄です』

そう言つて頭を垂れる。

伊丹には言葉は理解できなかったが、ヨタの態度から目の前のゴスロリが何か高貴な身分にある方なことが見て取れた。

ロウリイは頭を垂れるヨタの方を見ていた。

口元には笑みが浮かんでいる。

しかし、目は笑っていない。

傍らにはまだ幼いデシが、父に侍つて立っている。

『あなたの息子かしらあ？』

『ええ、名をデシといいます。緑色の彼らに息子を助けていただきました。感謝が絶えません』

『そう、良かったわねえ』

そう言うロウリイの視線は、ヨタに固定されていた。

ヨタは頭を垂れているため、その様子に気が付かない。

いつの間にか生まれていた妙な緊張感に、デシは一步後ろに下がった。

周りにいた自衛官も、その奇妙な空気に顔をしかめている。

『突然だけど、あなたの名前を伺ってもいいかしらあ？』

『はい、ヨタといいます』

『あなたの周りで、昨夜何か起らなかった？』

『炎龍が私の村にきました。応戦しましたが、力及ばず、村は破壊されました。他の皆とははぐれてしまい、ここまで息子と二人で彼らを探しているところです』

『そう、それはご愁傷様あ』

『ロウリイ聖下にそう言ってもらえるとは、亡くなった村のものも無事エムロイの元にたどり着けることでしょう』

『そうねえ……、そうだといいわねえ。間違つてもハーデイのところになんて行かない方がいいわよねえ』

『村の男は皆、勇敢な戦士です。女子供もそれに負けず、強い。此度の災厄にも負けない強さを持っております』

『ところで、昨夜私を通して、エムロイのところへ召される魂があったのだけれどお』

』

『その中にあなたのそっくりさんがいたのよねえ。……名前は確かあ、ヨタって言ったかしらあ』

ロウリーの纏う雰囲気が変わった。

ヨタが恐る恐る顔を上げる。

絶句した。彼女の顔には、笑みが浮かんでいた。

ただ、目は笑ってはいなかった。これっぽっちも。

それが壮絶さを物語っていた。

『ねえ、どうしてかしらね。私が確かに感じた魂と、同じものが現界に存在するなんて、ねえ?』

ロウリーが自らの身丈を超える得物を器用に振り回す。

それはちようど、断頭台のギロチンに似ていた。

ヒュツと、風を切る音と共に、ヨタの首が宙を舞った。

一筋の赤い雫が、後ろのデシの顔にかかった。

ヨタの体が力なく、地面に倒れ堕ちていく。

デシはいきなり起きた目の前の光景に、ふっと意識を飛ばした。



殺った!?

伊丹は突然黒のゴスロリが男の頭を吹き飛ばすのを見た。

彼には特地の言葉で話されている内容は理解ができなかった。

しかし、得物を持った少女が、尋常ではない空気を醸し出していることは理解できた。

いったい何が起きているのか。

次の瞬間には、人が殺されていた。

目の前で、あっけなく。

何のために？何の理由で？

それを理解できないまま、男の胴体と頭部が、離れていったのである。

他の自衛官たちも息をのんでその光景を見守っていた。

『……………どうして？』

沈黙を破ったのは、ハルバードで頭を刈ったロウリイだった。

彼女の顔には、わかりやすい驚愕の色が見て取れた。

伊丹たち地球の者たちにも、彼女の反応は奇妙に思えた。

次の瞬間、地面に倒れ伏したヨタの身体が、起き上がった。

それはあり得ない光景だった。

ロウリイも伊丹たち自衛官も、周りにいた特地の人々も信じられるものではなかった。

ヨタの身体はひとりでに足を動かし、とんで行った頭部を掌に納めた。

そしてそれを無理やり首と接着する。

首から流れ出る血液が、ビデオの巻き戻しのように戻っていく。

まるで魔法のような光景だった。

瞬く間に、ヨタの分かれた頭部と身体がくつつき、いつものヨタに戻ったのだ。

「やれやれ、これほど早く見つかるとは……………」

ヨタの口から漏れ出た言葉は、日本語だった。

「どうやら『神』という存在を、私は甘く見ていたようだ」

そう言つて、呆然としている周囲の視線を集めながら、ヨタが指を鳴らした。

次の瞬間には、ヨタはヨタとしての姿をしていなかった。

黒色っぽい灰色の体躯。

両腕につけられた大きな二つの鋏。

大きな二つの眼。

セミのような顔。

「……………バルタン星人」

自衛官の一人がつぶやいた。

伊丹は再び、あの日銀座で目撃したバルタン星人を、この特地の地で見るこゝとなつたのである。

バルタンは合成音声のような、低いノイズの混じつた声で自衛隊に話しかけてきた。

「やあ、日本の自衛隊の諸君。君たちの知つての通り、私がバルタン星人だ」

第六話 途方

一同が驚愕、呆然と立ちすくむ中、一足先に驚愕から立ち直り、亜神であるロウリイは行動に移していた。

地を割れんばかりに蹴って、目の前の異形に必殺の一撃を振り下ろす。

果たして、ロウリイの一撃は対象を二つに割った。

凄然とした笑みが、ロウリイの口元に現れていた。

しかし次の瞬間、その笑みが瞬く間に曇ってしまう。

代わりに現れたのは、困惑。

左右二つに分かれたバルタンの体から、それぞれ別の体が生えてきたのである。

右半身が残っていたのなら、左半身が。その逆もしかり。

ロウリイが渾身の力を込めて、横薙ぎの一撃を見舞う。

遠心力で強化されたハルバードは、二体とも体を上半身と下半身とに分断した。

別れた体は、失った部分を生やしてまたもや復活する。

彼女が繰り出す一撃一撃が、空を割り、大地を削るほどの威力をもっていた。

しかし、彼女が一体一体を両断することに、数が倍、倍にと増えていく。

苦い、苦い表情を宿しながらも、愛斧を振るい続けるエムロイの使徒。

対する相手は、ロウリイに対して何の感情の色も見せない。

喜びも、怒りも、哀しみも、何の反応も見せなかった。

霞を切っているようだった。

いや、彼女の一撃で巻き起こる風で、霞や煙ならば退散していくだ

ろう。

何よりも、実体があるものではない。

だから、怖くはない。

しかし目の前の異形はどうだ。

身体がある。実体がある。

ハルバードが相手の肉をえぐる感触を、触感を伝えてくれる。

実体があるのならば、殺せるはずだ。

そう思っていた。

しかし実際は違った。

異形は確かに、切り裂くことができた。

しかし殺すことは叶わなかった。

それどころか、数を増やしてこちらに向かってくるのである。

何も変わらない、何も変えられない。

今や視界を覆いつくすほどの異形の軍勢に、ロウリイは荒い息を吐

いた。

「……こんなの、反則よう」

そのすぐ後で、近づいた異形の一体がロウリイから得物を取り上げた。

ロウリイは、抵抗する力も残っていなかった。



ロウリイがバルタン星人に対して得物を振り回している最中。

自衛隊も特地の住人も、異形が起こす奇跡の数々を見ていた。

彼らにはその「理」が理解できなかった。

一体どんな「理」が、あのような現象を引き起こすのか。

正しく、彼らは魔法を見せられているようだった。

そこに、分裂したバルタン星人の一人が、ロウリイの元を離れてこ

ちらにやってきた。

自衛隊が手に持った小銃を構える。

彼ら一同には、皆緊張感が漂っていた。

バルタン星人はその光景を目にし、フオツフオツフオツと笑った。

面白いものだなと、バルタンが語り掛ける。

「世界が変わっても、文明が進化したとしても、人間の本质は変わっていないな」

バルタン星人テラーには、狙い定める自衛隊も、離れた場所で戦っているロウリイも変わらないように思えた。

武器が違う。彼らは銃で、彼女はハルバードだ。

文明が違う。彼らは近代的火器で、彼女は前近代の呪術的武装だ。存在が違う。彼らは人間で、彼女は亜神だ。

世界が違う。彼らは地球人で、彼女は異世界人だ。

これだけ違っても、バルタン星人に対して刃を突き立てようとする行動は変わらなかった。

何となく、バルタンはおかしくて笑い声をあげた。

「撃ちたまえ」

バルタンが両手を広げた。

ちようど、どうにでもしてくださいよと誘っているようだった。

「君たちが納得できるまで、好きなだけその鉛の弾を私に浴びせればいい。それで君たちの気が晴れるのなら、好きにしまえ」

自衛隊員の表情が引きつった。

彼らが今回特地に持ち込んだのは、前時代の骨とう品ともいえる火器だ。

特地に派遣するにあたって、どのような脅威にぶち当たるのかが未知数であったために、高価な最新式の重火器を持ち込むわけにはいかなかったのである。

しかし、仮に最新式の重火器で武装し、戦車や装甲車を持ち込んだとしても、彼らの心の曇りは晴れなかつたろう。

1が10になったとしても、届く存在ではないのだ。

「……ああ、的が小さくて敬遠しているのか」

そんな見当違いの见解を、バルタンがすると、彼の身体がみるみるうちに大きくなっていく。

影が自衛隊員を、コダ村の人々を、覆っていく。

それは先ほどまで絶対者として君臨していた炎龍よりもはるかに大きかった。

人々の中には、耐えきれずに意識を闇に落とした人々もいた。

あまりの出来事に、温かい液体を股間から垂れ流した人がいた。

口を開け何も言えず、ただ立ち尽くす人がいた。

「……全員、武器を捨てろー」

自衛官たちが手に持った銃を捨てた。

そして抵抗の意思がないという証に、両手を上にあげる。

バルタン星人があのだ笑い声をあげながら元の人間台のサイズへと戻っていく。

離れた場所で分裂していた個体たちも、皆こちらの個体の元へとやってくる。

別れた個体が、吸い込まれるように先ほどまで大きくなっていった個体に吸収されていく。

最後の一体の片手には、借りてきた猫のようにおとなしくなったロウリーの姿が。

彼女の頭につけられた大きなリボンが、こころなしか動物の耳のようになく垂れさがっているように見える。

バルタンが腕を振るうと、ロウリーが放り投げられる。

尻から落ちた彼女は可愛らしいうめき声をあげ、自らの愛斧を大事そうに抱えながら伊丹の後ろに隠れた。

「大丈夫か？」

『……反則、あんなの反則よう……』

そう言っつて伊丹の背後からちよこんと顔を出してバルタン星人の方を伺う。

彼女の顔にはまぎれもなく怯えが見て取れた。

伊丹は空を仰いだ。

彼の頭には、『ウルトラマンガイア』の歌詞の一節が流れていた。

ギリギリまでやった、これ以上は無理だ。

ウルトラマンに来てほしい。

彼はそう思いながら、途方に暮れていた。



同じころ、バルタン星人テラーも頭をかかえていた。

もちろん、自衛隊員や特地の人々がその表情から読み取ることはできないが、内心想っていたのである。

やりすぎた、と。

彼の当初の考えでは、平和に話を進めるために、武装解除を勧めようと考えていた。

そのため、攻撃しても無駄だということを理解させるために、無限増殖するクローン技術を駆使したのだった。

そして、自衛隊員たちの火器を一番わかりやすく無効化しようと思いい、巨大化したのだ。

弾がなければ、銃はただの鉄の塊だ。

彼らの選択に任せようと思った。

どうせ、バルタン星人とまともな話が最初からできるとは考えていないのだ。

彼らが疲れ、行動できなくなったときにこそ、口先の力が生きてくる。

結果、やりすぎた。

驚愕、畏怖、恐れ、その他もろもろの負の思いを見て取れる。

彼らの眼には、自分のことを悪魔とみているだろう。

実際、ビジュアル的には不気味だし、敵キャラだし、悪魔っぽいし。

自衛隊員は全員、武装を解除して手を挙げている。

特地の人々は皆一様に恐れをなして、腰を抜かしている。

これからどうするべきなのか。

交戦の意思はないと応えても、聞き入れてくれるのか。

このまま消えてしまいたかったが、デシのことが気にかかった。

彼の父は、あの亜神が言ったとおりに、黄泉の世界へと旅立ってし

まった。

テラーがあの場合に現れるのがもう少し早ければ、助かったのかもしれない。

バルタン星の科学にも、死者を蘇生させることなどできない。

ウルトラマンのように、自らの命を分け与えることもできない。

せめて残った小さな命だけでも助けようと、デシの記憶から父の複製を作り上げ、そこに乗り移っていたのである。

デシはまだ幼い。

彼が独り立ちするまでには、様々なことを経験しなければならぬだろう。

それを親なしに生きるには、幼い彼には厳しすぎる。

いつまでもこの世界にいるわけではないが、せめて少しでも、彼の力になろうとヨタの姿を借りていたのだった。

それを、これほど早く見つかってしまったとは……。

幸い、デシは今気絶しており、ヨタがバルタン星人であることはこの場にいる人々しかわかっていない。

記憶操作して、ヨタⅡバルタンの記憶を消去すれば、何とか……。

しかしそれでは、人間に危害を加えないというゼロとの約束を破ることになってしまう。

テラーは頭を抱えていた。

彼の緻密な脳を以ってしても、この局面を乗り越える妙案を浮かべることができなかった。

彼のまた、空を仰いだ。

助けてくれ、ウルトラマン。

果たして、祈りは届いた。

空に不思議な赤い光の玉が、突如として浮かんでいたのである。

◇

突如として現れた光の玉が発する輝きに、一同は目を細めた。

次の瞬間には、玉は巨人へと変化していた。

僕らが待っていた、ウルトラマンであった。

「……ウルトラマン」

自衛官たちは一同、胸をなでおろした。

特地の人々は、その正義の巨人を初めて目にした。

その神々しき、あの悪魔と対比するようないで立ち、巨人としての姿に、神の姿を見た。

彼らは一同自然とひざまずき、手を合わせていた。

『バルタン星人テラー、こんなところで何をしている？』

『やあ、ウルトラマン。来てくれて助かったよ』

『まさかゼロとの約束を破って、人間たちに危害を加えたのではあるまいな？』

『誤解なんだ、話を聞いてくれ！』

テレパス 念話にて会話をしているため、伊丹たちには会話は聞こえてこない。

しかし、感受性の高い者たちには、確かに反応があった。

エルフ族のテユカ、及び魔法使いとして卓越した才を持つレイなどは、頭を揺らす音に揺り動かされ、苦しそうにしている。

他にも何人か、テレパスの影響を受け、苦しそうに頭を押さええている者がいる。

この世界の魔法は、ある種の「理」に沿って発動することができる。

魔法使いとしての才をもつものや、エルフのように精霊たちと交信する者にとって、「理」は身近な存在である。

常にアンテナを張っていると云ってもいい。

もしも、宇宙人が話す宇宙言語、及びテレパスが別の「理」に沿うものだとしたら、彼らのアンテナが無差別に拾ってしまったとしたら。

人間よりもはるかに進化した光の巨人や、バルタン星人の常識を受け入れることなど、彼らにできるのだろうか。

それが、答えだった。

『場所を変えよう、ウルトラマン』

『そうだな』

バルタン星人テラー、そしてウルトラマンは同時に姿を消した。彼らがいなくなったことで、頭を謎言語で揺さぶられていた者たちも、正常に戻った。

残った者たちは、生き残ったことをまだ実感できないでいた。

やがて、アルヌスに建てられた自衛隊の仮設基地に、伊丹たちから一報が届けられる。

『特地にて、ウルトラマンとバルタン星人出現!!』

その一報はすぐさま、日本の首脳の元へ、また世界の首脳の元へと届けられた。



寺島は自室のちやぶ台をはさんで向かい合っていた。

彼の目には、壮観な光景が広がっていた。

ウルトラマン。

ウルトラセブン。

ゾフィー。

ウルトラマンメビウス。

彼らの手首には、地球で長時間活動するためのエネルギーコンバーターがはめられている。

五人で囲むには、いささかこの部屋は狭い。

妙に圧迫感のある中、寺島が口を開いた。

「来てくれてありがとう、光の戦士たちよ」

「ゼロから話は聞いている。それで、私たちに何を頼みたいと言うのだ?」

「それよりも異世界での出来事だ。それをまず説明してもらおう」

ウルトラセブンの言い分をさえぎって、ウルトラマンが問い詰める。

部屋が狭いこともあって、彼がすごくむと押しつぶされそうになる。

「なぜ、お前は門を超えた?」

「単に興味本位だ。……といっても、君たちは信じないだろうね」

寺島が語ったのは、リスク管理のことだった。

光の国の技術から見ても、世界を、次元を超えることは容易ではない。

さらに異なる世界をいつまでもつなげるためには、膨大な、それこそウルトラ戦士の力を結集せねばならぬほどの大きなエネルギーが必要となる。

バルタンの科学力でも、そこまでの装置をつくることはできない。しかし、現在この地球上に出現している「門」は、あきらかに二つの異なる世界をつないでいる。

それはどんな利益を、リスクをもたらしかわかったものではない。下手をすれば、大災害を引き起こす可能性がある。

放っておくには、あまりにも危険で未知数だった。

そのため、寺島はテラーとして、特地に潜入し情報を集めていたのだった。

しかし、彼が現地住民に変装して平和に情報を集めようとした矢先に、今回の騒動が起こったのである。

彼が思っていたよりも、異世界には未知があふれていた。

魂について感じられる存在がいたことを、彼は想定しえなかった。

後は、なんとか話し合いで落ち着けようとした矢先に、ウルトラマンが現れたのだった。

「……なるほど、事情は理解した」

「君の言い分もわかった」

「それで、私たちに頼みとは？」

彼らに一先ずの納得を取り付けることができたようだった。

そのことに安堵し、寺島は疑問に応える。

「私の頼みとは――」

第七話 出現

夜は来る。

あの日、あの場所で人々に与えた影響は甚大なものであった。人々はその衝撃からまだ立ち直ることができないでいる。それでも、時間は平等に誰にでもやってくる。

あの日、特地に現れた二人の巨人に、異世界の人々は確かに神の姿を見た。

そして、神に対する敵、「悪魔」の存在も。

キャラバンは各々に集まって、薪の火を囲んでいた。

途切れることないざわめきが、火を囲んで行われている。

その一つに、伊丹たち自衛隊の姿もあった。

一同、彼らの表情は暗い。

異世界というなれない土地、風土に加え、予想外の出来事の連続。

極めつけに今回の炎龍、バルタン騒動。

疲労が、彼らの体を蝕んでいた。

いや、疲労だけではない。

彼らは国防を担う自衛官として、日々訓練に明け暮れている。

時には困難な任務にも立ち向かい、作戦を遂行している。

彼らはエキスパートだ。そのためにも日々の訓練をしている。

銃を扱うのも、ある種の特権のように思えるかもしれないが、それにふさわしい技術や知識を身につけている。

彼らが流した汗や、過ぎした時間が、そのまま彼らの自信となっている。

その自信が、ボロボロに打ち砕かれている。

覚悟はしてきたつもりだった。

異世界という未知の世界へと飛び込む、危険な任務である。

敵は地球に侵攻してきた軍隊だけではない。

気候、風土、文化、人種、それらがまったく違う相手に対して、どう接すればよいのか。

この困難な任務に対して、選りすぐりの自衛官たちが各地の自衛隊基地から派遣されてきた。

彼らには実績があり、知識があり、技術がある。

国家の安全保障を担うにふさわしい力を備えているのだ。

さらに近世以降に発展した重火器。

それは異世界の軍隊よりも優位に立つことのできる彼らの武器であつた。

戦うために必要な武器は、彼らに力を与えてくれる。

困難な任務ではあるものの、必ずやり遂げてみせると、思っていた。

甘かつた。

彼らは沈黙を保っていた。

何かを耐えるように、じつと揺れ動く炎を見ていた。

伊丹耀司も、その一人だった。

彼の傍らにはエルフのテユカ、魔導士であるレレイ、そして亜神であるロウリイが控えていた。

「……知っているの？」

レレイが尋ねた。

明らかに、異世界にやってきた自衛隊員は、あの悪魔と光の神を知っている風だった。

彼らが、あの存在をここに連れてきたのか？

しかし、そういうわけでもなさそうだった。

自衛官たちは皆、あの悪魔に彼らの武器を向けていた。

あのパパパー、とやれば人を殺すことを可能とした、すごい武器である。

彼らにとつても、あの悪魔は敵なのだ。

彼らの話す言葉は理解できないものだった。

少なくとも、彼らの言葉を学び始めたばかりのレレイの語彙力では、あの時悪魔と何を会話していたのかは理解ができない。

いくら天才的な頭脳を持つといつても、根本的に語彙力が足りてな

いのだ。

ただ、彼女には簡単な日本語を理解し、翻訳することができる。だから、彼女たちは話してほしかった。例えわからなくても、あの神と悪魔について。

「――俺の世界にある、物語に出てくる存在なんだ」

彼らはこことは違う、遠い、遠い星からやってきた。

彼は伝えられないままでも、口ずさみ始めた。

光の国からやってきた、巨人の話。

◇

「門」の向こう側での出来事が明るみになっていくにつれて、地球の人々の関心は自然とその方向へと向いていった。

彼らの関心は、この地球上ではもう新しい場所では見つからないとされている、豊富な資源である。

石油が、石炭が、レアメタルを含む鉱山資源が、何よりファンタジーの小説などでしか出てこないような、地球外の物質など。

特産は宝島だった。

銀座での一見以来、姿を見かけないバルタン星人やウルトラマンよりも、人類に利益をもたらすことが確実視される異世界に関心が移るのは、自然なことだった。

しかし、彼らがそのことを知り得たのは、メディアを通じてである。日本政府の管轄領となった「門」に対しての情報統制は、当然制限されている。

「門」の中で何が起きているのか、それを知りえるのは、日本政府だけなのである。

特産に派遣された自衛隊が、異世界を散策している。

どんな場所なのか。

どんな危険があるのか。

どんな資源があるのか。

人々は待てなかった。

彼らが欲しいものは、彼らに利益をもたらす存在があるかどうか。そして、懸念があった。

「門」を独占している日本政府が、特地からもたらされる恵みを、独占してしまうのではないかという懸念である。

わからないのだ、彼らには。

異世界で何が行われ、何が起こっているのか。

わからないから、気になる。

知りたい者たちにとっては、政府の曖昧模煇な答弁は邪魔なものではない。

ある日、自衛隊関係者の報告で、人民に被害が及んだとの報告があった。

自衛隊の目的は、人民を守ることである。

なのに、人に銃を向けたのか!?

現政党に対立する野党の議員は、そう糾弾した。

彼らは特地に生息するドラゴンを見たことがない。

いまだに、その存在を信じられないのだ。

一方、こうした野党やマスコミの追及に対して、総理大臣含む与党の面々も辟易としていた。

彼らは日夜、国のかじ取りを任せられる。

敵は多い。

彼らは疲れていたのだ。

「では、委員長、その事件の当事者となる自衛官や、特地の人物を参考人としてこの場に招致したいと考えているのですが」

そう言った野党の議員の提案は受け入れられた。

特地から特別に、被災者が国会議事堂に派遣されることに決まったのである。

『ああ、もう一ついいかな?』
ぎよつとした。

いつの間にか、議場の端に何かがあったのである。

空いていた席に座っていたのは、異形だった。

バルタン星人。

日夜議論されていた問題の一つが、何にも気づかれず、誰にも気づかれずに足を組んで座っていたのである。

議員たちは騒然となった。

彼らは自分が腰かけていた席から動けないでいた。

バルタン星人のせいではない、彼らの身体自体が固まってしまっているのだ。

喉がからからに乾いていく。

口がうまく動かすことができない。

嫌な汗がふつふつと沸き上がっていく。

『緊張しているな、……まあ、無理もない』

そう言つてフォッフオッフオッフオッフオと笑う。

勇気のある控えていた警備員たちが議員を後ろにやり、自分を楯とする。

警棒を構え、対峙する。

バルタンに動きはない。

椅子に座り足を組んだまま、人々の姿を眺めている。

『……皆さん随分とお疲れのようだ。今日わたしがここに来たのは、そんな君たちの懸念を一つ払拭してあげようと思つてね』

ゆつくりと、バルタン星人が立ち上がる。

警備員たちが身構える。

『国会への召集の日、私も参加させてもらおう。そこで私と、君たち地球人との間柄について決着をつけようではないか。政治的に、完全に』

一同は呆然と立ち尽くしている。

不気味な、バルタン星人の笑い声だけが議会の中でこだましている。

バルタン星人の姿が、光を伴って白くなっていく。

そして、彼の姿がそこから消えたのだった。

『ああ、言い忘れていたが、サプライズゲストを呼んである。楽しみにしていてくれたまえ』

そう不吉な言い分を残して。



バルタン星人の国会への招致。

それは瞬く間に世界中に波及し、世間を沸かせた。

今度は明確な恐怖の対象としてだ。

人々は恐れていた。

宇宙人の地球侵略という、創作の中でしか見られないような出来事に。

人々は体験したことがなかった。

自分たちとは違う知的生命体が、彼らのすぐ近くに存在しているという事態を。

宇宙は広い。

産業革命以降、急速に発展した人類の科学でも、まだすべてを見通すことは叶わないのだ。

ましてや、月に行くのにも一苦勞であるのに対して、バルタン星人はどうだ。

彼は創作の中で出てくる宇宙人だ。

そう思われていた。

しかし、どうやら違うらしかった。

遠い、遠いどこかの銀河に、彼らの故郷であるバルタンの星がある。いや、あったらしい。

本当かどうかはわからないが、どうやらバルタン星人の故郷である惑星は、科学実験の結果失われたようである。

痛ましい話だ。

それで終わるなら、可哀想な宇宙人の話として終わるだけであるが、そうではなかった。

彼らは自分たちが移り住む新たな星を求めて、宇宙を旅している。

そこで見つけたのが、この地球であった。

そこですでに住んでいる知的生命体とひと悶着あってしまった。

地球という星は、広いようで狭い。

人類はすでに、その許容量を超えるほどその数を増やしていた。

それは豊かさの象徴ではあるが、同時に限界が近づいていることも意味していた。

我々は偉大なこの星の恵みを受けて、生を受けている。

自然は恵みを創出する。

人間はその恵みを搾取する。

搾取する量が、自然の生み出す恵みを超えた今、人間は「外」の世界に手を伸ばし始めた。

まだそれも最初の段階である。

そこに、バルタン星から移民がやってくる。

どうやら、20億3000万人ほどいるらしい。

それを受け入れ、共存することができるのか。

この、飽和している宇宙船地球号で？

無理だ。

YESと言うには、それはあまりにも難題な問題であった。

創作の中では、人類はバルタン星人を受け入れなかった。

結果、戦争になった。

それが、今や現実となっているのである。

現実のバルタン星人と、現実の地球人の対立。

戦争になる。

互いの生存をかけた、血で血を洗う戦いである。

人類の歴史は、戦争の歴史であるという人がいる。

それだけ長い間、人々は戦いを続けてきた。

一体何人の血が流れたろう？

いくつの命が失われたろう？

戦争は悲惨である。

そのことを私たちは知っている。

知ってはいるものの、実感を失っていた。

ましてや、相手は人間ではない。
宇宙からやってきた、来訪者なのである。

彼らの歴史の中で、エイリアンと交戦した記録はない。
創作の中でだけ、存在する。

どちらにせよ、絶望的な状況だった。

すでに各国は、日本に有力者を派遣することを決めている。

日本も、受け入れの体制を整えている。

「門」どころの騒ぎでは、無くなっていた。

彼らの関心・興味は、もっぱら行方不明だった宇宙人のなすこと
だった。

そして、悪魔に対抗できる光の巨人の存在。

地球全体で、深刻な騒ぎとなっていた。



「ふふ、大変な騒ぎになっているじゃないか」

寺島はいつもの行きつけの喫茶店で、今日の朝刊に目を通して
いる。

新聞各社どの記事も、一面バルタン星人のことばかりであった。

彼が昨日突如として日本の国会に現れ、言い残した言葉。

その真意をとらえられず、人々は今、混乱の極みにあった。

『侵略の前兆か?』

『バルタン星人の国会答弁』

『警備員、侵入を察知することができず』

『各国の首脳で協議』

『ウルトラマンは、今どこに』

そのような見出しが並んでいる。

寺島は苦い液体を喉に流し込み、席を立った。

そして再び、人の波の中へと消えていく。

誰も彼がバルタン星人であると気づきはしない。
そして彼も一人の人間として、日常の中へと戻っていった。

第八話 答弁

その日は、よく晴れた日だった。

青い空、照らす陽光。

しかしそれよりも強い熱量を放つ集団があった。

東京都千代田区に建てられた国会議事堂には、かつてないほどの人の群れが詰めかけていた。

銀座に突如として開いた異世界への「門」。

そして特地と名付けられた、門の内では出会った人々。

彼らの中の何人かが、今日、この国会議事堂に招致されているのである。

主に特地に派遣された自衛隊の実情を知ることが目的とされている。

それ以外では、特地の文化や生活などを実際に生活をしている本人から確認することがあるだろう。

皆は知りたがっているのだ。

門の先にある、未知なる世界について。

それを知りえるのは、こちらの世界では、派遣された日本の自衛隊員しか知れない。

その特権を悪用していないかどうか、それを本会議にて暴こうというのが、野党のねらいであった。

特地から招致されたのはテユカ、レレイ、ロウリイの三人。

彼女たちの浮世離れた容姿がテレビで放映されると、すぐさま世間の反応が返って来た。

金髪碧眼の美しい容姿を持つテユカ。

短めの髪でRPGに出てくるような魔法使いに似たポンチョを着こんでいるレレイ。

黒いゴスロリ衣装に身丈をはるかに超える長物を持った、ロウ
リイ。

彼女たちの姿かたちは、地球においても浮きだつて見え、目立って
いた。

自衛官を傍らに侍らせた彼女たちの姿を見た人々は、一度で理解が
できた。

彼女たちこそ、門の外からやってきた位階からの訪問者であると。
スマートフォンで写真を撮られ、アップされた彼女たちの写真のお
かげで、とある提示版サイトが一つの祭りとなっていた。

前日から大きな盛り上がりを見せていたが、当日はそれ以上だつ
た。

日本の公共放送であるNHKは、普段ならばそれほど視聴率は良く
はないが、その日は記録的な視聴率をたたき出した。

具体的な数値は伏せるが、大晦日に放映される某歌番組よりも人々
に見られていたという。

それほど、世の関心ごとが高かつたのだろう。

更にNHKは衛星を通じて、世界に向けて発信される。

日本の政治家たちがどんな答弁を行うのか。

特地に赴いた自衛官たちの行いはどうだったのか。

異世界からやってきた人々は、一体どんな人物なのか。

こうした疑問が、この答弁で明かされる。

そう思つて、人々はこの放送を見ているのである。

連日新聞欄の一面やニュース番組を騒がせている「門」に関する公
式の情報。

皆が求めていたものであった。

放映内容は、普段の日本の国会と変わらないように見えた。

野党の議員が質問を投げかけ、与党の人間や自衛官が答える。

今回は、回答者として特地からやってきたテユカやレレイ、ロウ
リイもその人物としてあげられる。

人々は繰り広げられる答弁の中で、各々に最適な情報を引きだして
いこうと考えている。

しかし、その日は皆が一様に、どこか固いように見えた。

画面の前に座ってテレビを眺めている人々は、固くなった表情、固くなった声、固くなった空気を感じ取っていた。

それにつられて、どこか自分の体も、心も固くなっていく。

今日という日がどういう意味を持つのかを、自分なりに体感しているらしかった。

特地からの訪問者に対しての大きな喜びの反応も、どこかから元気だったのかもしれない。

いや、絶望に負けないように、自信を奮い立たせようとするちっぽけな勇気の産物だったのかもしれない。

自衛隊と異世界からの訪問者に対する答弁は、大きな問題もなく終わった。

特地のこと。

炎龍のこと。

亜神のこと。

エルフのこと。

魔法のこと。

そんなファンタジックな情報を、当の本人から引き出したところで、国会での答弁は終わりを告げた。

野党の人間からすると、結果は芳しくない。

彼、彼女たちが想定していた与党及び自衛隊を攻撃する材料が得られなかったからである。

それどころか、NHKで放映されたその姿は、世界中で失笑を買ったことだろう。

まあ、終わったことを言ってもしかたがない。

委員長が議会の閉廷を告げる前に、彼は現れた。

『委員長、お待ちせして申し訳ない』

それは虚空より突如として出現した。

答弁するための席に現れた、バルタン星人の姿に一同が身を固くした。

第二ラウンドの始まりであった。

◆
彼は人々の視線を一齐に受けていた。

その光景はテレビを通じて、ネットを通じて、肉眼を通じて人々の意識に共有される。

「門」からの来訪者へは期待があつた。

退屈な日常とは違う、創作でしか見られないようなファンタジーがあることを。

彼女たちの口からは、これまた期待を裏切ることない言葉が次々と飛び出してきた。

人々はそれに沸き上がっていた。

テレビの前で、ネットの中で、会話の中で。

この地球とは違う異世界への期待が、胸の内に膨れ上がっていく。それは良い気持ちだった。

良いというのは、気分がいいということである。

しかし、その気持ちが一瞬時に薄れていく。

人々は彼のことを知っていた。

テレビで、新聞で、ネットで、そのほかメディアを通じて、彼のことに ついて連日放送されていたからである。

彼は一般的には創作の中に出てくる存在であると認知されていた。当たり前である。人間は、地球人以外の知的生命体と出会ったことがないからだ。

人類の目標の一つとして、宇宙進出がある。

広大な宇宙、今もなお無限に広がり続けているこの黒い空間は、無限の可能性を秘めている。

人類は、その未知の可能性の中に、自分たちのような知的生命体の姿を幻視した。

創作物の中に著された「宇宙人」は、さまざまな姿をしている。

その中でも、特に人気のある宇宙人の一人が、バルタン星人なのだった。

『ウルトラマン』という日本の特撮番組を好きな人物は、今や日本を越えて世界に広がって存在する。

ネットワークの発達によって、人類は世界中どこにいても、その姿を見ることができるようになった。

その恩恵もあって、今回の銀座の騒動も容易に人の目に共有されることとなっている。

彼らは創作としてのバルタンの姿は知っていた。

彼らはそれが創作——つまりはフィクションであることを知っていたし、そう認識もしていた。

だから、どこまで行っても一つの壁があつたのである。

それは二次元と三次元の壁ともいうべきものだった。

創作であるがゆえに超えられない、超えてはいけない壁である。

そして今、その壁を越えてあのバルタン星人が現実の世界にやってきたのである。

ウルトラマンと共に銀座に出現したときは、人々は喜びの声を上げた。

彼らの夢想していた、可能性の一つが、本当に彼らの目の前に現れた。

こんなに嬉しい、わくわくすることがあるだろうか。

一度は、彼らは姿を隠した。

大した銀座への被害もなく、人々はウルトラマンが現実に現れたことを喜んだ。

そして彼ら宇宙からの訪問者は、再びその姿を現した。

今度は、バルタン星人だけだった。

ウルトラマンは、いなかった。

人々は思い出した。

バルタン星人の当初の目的が、地球侵略であつたことを。

もちろんその情報は創作の中にだけしか存在しえないが、現実と創作との境が曖昧になっている今となつては、その情報も信ぴょう性が

あるものとなっている。

人々は恐れを取り戻した。

未知なるもの、わからない者に対して人々は恐れを抱く。

今日、実際改めて、異形の存在を認識することができた。

長くなってしまったが、現状を報告しよう。

その光景を目にした人々全員が、一様に体を固くしていた。

固唾をのんで、その光景を食い入るように入っていた。

国会議事堂内で撮影された映像には、あの宇宙人の姿が映っていた。

ズームで映された映像には、奇妙なリアリティがあった。

チヨキチヨキと動かす二つの大きな鋏の滑らかさが。

ぎよろぎよろと動く不気味な二つの黄色い目が。

あの特徴的な生の声が。

本物であることを、現実であることを皆に教えていた。

映像を目の前にした人々でさえそうなのだ。

今、国会議事堂内は騒然となっていた。

ざわめきは納まる様子がなかった。

表情を固くし、頬をつりあげた議員たちは、視線を宇宙人に固定している。

バルタンはその光景を楽しんでいるように嗤っていた。

フォッフオッフオッフオ、その嗤い声が人々の不安を煽っていく。

議場には、与野党の議員と共に、審問会に召集された伊丹たち自衛官、異世界からの訪問者であるテユカ、レレイ、ロウリイが残っていた。

一同が同じように表情を固くしている。

カンツ、カンツ、というハンマーを叩く音が響いた。

我に返った委員長が、勇敢にも会議場の收拾を凶ったのである。

静粛に！静粛に！

その言葉に会議場が静かになっていく。

その場にいるそれぞれの人が、事の成り行きを見守っていた。

どうか、悪いことにはならないようにと、祈りながら。

人々が席に着き、会議場が静かになることを見届けたバルタン星人が、話を切り出した。

彼の出会ったことがある人物には聞き覚えのある、低い合成音声のような声である。

「諸君が不安に思う気持ちも、よくわかる。————そこで委員長、人々の不安を払しょくすることのできる、スペシヤルなゲストをお呼びしたいと考えているのですが、よろしいかな？」

「……その人物とは、誰かね？」

「あなた方が今一番求めている人物ですよ。————ああ、外にはほら」

バルタンの言葉の後、会議場に備え付けられた巨大なモニターに電源が灯った。

そこには国会議事堂の外の様子がリアルタイムで報道されている。外は騒然となっていた。

それは不安からくるものではなかった。むしろ希望に満ち溢れていた。

国会議事堂の空には、四つの赤い光球が浮かんでいた。夕日のように、燃えている赤い太陽は、その姿を変化させていく。美しく、どこか神聖な光だった。

希望の光は、人々の希望の象徴に姿を変えた。

彼らが待ち望んだ存在が、国会議事堂の外に並んで立っていたのである。

来たぞ、われらのウルトラマン！

「あなた方がよろしければ、彼らをここに招きたいと考えているのですが、いかがかな？」

人々の返事は、決まっていた。



講堂内は異様な雰囲気にも包まれていた。

証人席には、バルタン星人、ウルトラマン、ウルトラセブン、ゾフィー、ウルトラマンメビウスが並んで座っている。

かつて『ウルトラ8兄弟』という映画の発表会見にて、ウルトラマン8人が並んだ風景が撮影されたこともあったが、今回はその光景よりもさらにシユールなものであった。

違うのは、本物であるがゆえのリアリティや、神々しさといった点だ。

心なしか、彼らの身体が光を放っているようだった。

彼らはテレビの映像に登場する着ぐるみなどではなかった。

まぎれもなく、遠い宇宙の果てからやってきた、光の戦士なのだ。

地球人たちは今、違う星からやってきた二種類の宇宙人と向き合っていたのである。

ごくりと、誰かの喉を鳴らす音でさえ、沈黙した会議場では大きな音となる。

重い空気の中、バルタン星人が右手の鋏を高く上げる。

「委員長、発言をしても？」

「……あ、ああ。どうぞ」

バルタンは前に出て、マイクの備わった議席に立つ。

肉眼で、映像で、その姿が映し出されている。

「地球人、そして異世界からやってきた隣人たちよ、こんにちは。今回、君たちの貴重な時間をいただいたのは、私が人間との政治的対話を望んだからだ。君たちの中には、私を恐れ、排除しようとする人もいるだろうが、まずは話を聞いてほしい。君たち地球人を害する意思など、私にはない。……その証拠と言っては何だが、遠い宇宙の彼方から、偉大なる四人の戦士たちを応援に呼ばせてもらった。そのことについて、この場で感謝を申し上げたい」

怪獣退治の専門家、ウルトラマン。

惑星観測員である、ウルトラセブン。

宇宙警備隊の隊長、ゾフィー。

まだ若手ではあるものの、宇宙警備隊の一員であるウルトラマンメ

ビウス。

「彼らは貴重な時間を割いて、私と地球人との対話の仲介役として、この場に駆けつけてくれた。私と君たち地球人、そして彼らとの議席を設けることで、この場を政治的な意味を持たせたいというのが、私の狙いだ。……それでは、光の国の代表として、ゾフィー、何か一言お願いできるかな？」

バルタンが促すと、席に座っていたウルトラマンの一人が立ち上がった。

胸に輝くその功績の証が、彼をゾフィーであることを示している。バルタンは横にのいた。

ゾフィーがマイクの前に立つ。

地球の人々は、期待するように彼の言葉を待っていた。

「えー…、地球の皆さん。そしてこことは違う世界からやってきた人たち、私ははるか宇宙の彼方、M78星雲の光の国からやってきた、宇宙警備隊の隊長をしております、ゾフィーといいます。本日は、ここにいるバルタン星人より、地球の方との会談を行いたい、そこで公平を期すために、私たちウルトラ族に仲介してほしいとの指名がありました。……宇宙は無限に広がり続けています。この広大な黒い世界には、皆さんがまだ知らない、会ったことのない他の知的生命体が存在しているのかもしれませんが。地球人の方々はまだ若い。宇宙へ進出することを夢見始めたばかりでしょう。当然、バルタン星人や私たちのように、すでに宇宙空間での活動を行っている種族とは、常識、知識、技術体系なども異なっています。彼を恐れる気持ちは、私にもわかりません。そこで私たちが間に入り、あくまで公平に、政治的な話し合いを実現したいと考えています。これは、地球人とバルタン星人との約束です。もし彼がその取り決めに破るならば、私たちはあなた方の代わりに、彼のことを断罪しましょう。もしも地球人の方が破ったならば、彼の為す事には我々は関与いたしません。あくまで第三者の立場として、あなた方の会談をより良い結果を残すために、私たちも力を尽くすことを約束します！」

身振り手振りを交えながら、ゾフィーは言葉を終えた。

会場では、相変わらずの沈黙を保っていた。

しかし、多少なりとも空気感が変わってきたようである。

どうやら、バルタンの目的は、人々の想定していた最悪なものとは違うようである。

ゾフィーが退席し、再びバルタンがマイクの前に立つ。

「ありがとう、ゾフィー隊長。繰り返す事になるが、今日ここで行われる私と君たちとの会談は、ウルトラ戦士が見ている中で行われる。私も発言を捻じ曲げたり、取り決めに反故することができないようにするためだ。だから、君たちもいくらか安心してほしい。これは私から地球人への誠意だと思っしてほしい。私は決して、君たちと争うことを望まない。だから、こうした政治的な決着をつけようと考え、今日の議場にお邪魔させてもらったのだから」



まずは、そうだな……、私のことから話そうか。

私はバルタン星人テラー。

テラーは個体識別名で、君たちで言うところの名前に当たると思っ
てくれて構わない。

呼び方はテラーでも、バルタンでもお好きにどうぞ。

私は君たちが知っているところの、バルタンの星からこの地球に
やってきた宇宙人だ。

私たちの故郷は、とある実験の失敗により消滅した。

そこまでは、『ウルトラマン』で見た通りかな？

しかし、私は残った20億3000万の生き残りとは、別の道を進
んでいた。

あの日、実験の失敗により引き起こされた大爆発に私は巻き込まれ
た。

視界が闇に沈み、気づいたらバルタンの宇宙船ごと、この惑星に転

移していた。

ここで君たちには悲報なことに、この世界にはウルトラの星も、バルタンの星も存在しない。

どうやら、私は時空を超えてこの星に流れ着いたようだった。

私は壊れた宇宙船を修理しながら、この広い宇宙を探索し続けた。しかし、いくら探しても私の同朋を見つけることは叶わなかった。

そして地球で地球生命体の出現が見られるようになる、私はこの星を第二の故郷として生きることにした。

顔や種族も違う私が君たち人類と同居することができるのか？

その疑問を解決してくれたのは、バルタン星の優れた科学力だ。

私はこの星の人々になりすまし、その文化や法、ルールを守ることによって社会に同化した。

人間は他人にはさほど興味を示さない。

人間が作りだした社会の風俗、習慣になじみ、その時々で施行される法律を守ることで、私は人間として生活することができた。

私は今、日本で生活をしているが、別にそれは日本に限ったことではない。

バルタンの寿命は、人間のそれをはるかに超えている。

時代によって、私は土地を移動し、その都度現地の住民、風俗に土着化していった。

たびたび人間が引き起こす争いもまた、私がかつて住んでいた土地を移動する契機となった。

数々の出会いと別れ、それらを経験することで、私は人間を深く理解することができた。

その上で、改めて君たちに宣言しよう。

私は、地球を侵略する意思など、欠片も持ちえないことを。

現在、地球上においてバルタンからやって来た宇宙人は私一人だ。

しかし、私は人間の一員としても、この地球上で暮らしている。

私は一人ではない。

故郷を失い、友や家族とも別れを経験したが、それでも私は生きて

いけた。

この地球で、私は新たな出会いを経験することができた。地球の皆さん、どうかわかってほしい。

私をこのまま、人間のままでいさせてほしい。

私は人間のやること、為す事に干渉する気はない。

発展も滅びも、たとえ見通しのきかない未来にどうなったとしても、私は君たちには干渉しないことをここに誓いましょう。

この約束は、君たちだけに宣言するのではない。

この場にはるばる来てくれた、ウルトラ戦士たちも聞いています。もし私が、この約束事を破ることがあり、人間に害を与えるような事態になったとしたら、空に浮かぶウルトラの星が輝き、君たちのもとに彼らが姿を現すだろう。

そして、君たちの代わりに私を罰するだろう。

彼らは私たちバルタンの嫌いな、スペシウムを生産することができない。

私も、死ぬことは恐ろしい。

恐ろしいからこそ、格好の罰となり得るのだ。

長くなったが、私はバルタン星の生き残りとしても、一人の人間としても、君たち人類の発展と行く末を応援している。

私はこれから今まで通り、姿を隠す。

もしかしたら、君の周りにいる人物の一人が私であるかもしれない。

しかし、どうか恐れなくてほしい。

地球にいるバルタン星人テラーは、悪い奴ではないと、そう思っしてほしい。

これにて、私からの話を終えさせてもらう。

ご清聴、感謝する。



その日の各国の新聞の一面を、その写真が飾った。
日本の内閣総理大臣と、バルタン星人とが手を合わせている写真である。

二人の周りには大勢の人が囲んでおり、何台ものカメラで撮影されているのが見て取れた。

この日、人類は歴史上に残る出来事を記録することになった。

宇宙からやってきた隣人との、友好を結ぶことに成功したのであった。



月の下で歩く二つの影があった。

一人は、バルタン星人テラーが擬態した姿である、寺島鉄魅の姿が。もう一人は、ウルトラマンが擬態したハヤタ・シンの姿が。

空には一面、星の輝きが瞬いていた。

美しい光景だった。

「もう行くのか?」

寺島が尋ねた。

ハヤタが首肯する。

ウルトラ戦士が守護するのは、単一宇宙だけではない。

彼らの活動は、マルチバースにまで及ぶ。

助けを呼ぶ声があれば、かけつける正義のヒーローなのである。

「バルタン星人テラー、……いや、寺島くん、君に会えてよかった」

「私もだよ、ウルトラマン」

彼らの間には、奇妙な友情が生まれていた。

当初、両者ともにある種の因縁を感じていた間柄であったが、こうして会談を終えた今では、ともに笑いあえる仲になっている。

ハヤタが右手を差し出した。

それを寺島が受け取る。

寺島の手には、丸い赤い石が握られていた。

「これは？」

「君と私たちとの、友情の証だ」

赤い石は、夜の街中でなお、輝きを放っていた。

「……お別れだ」

「さらばだ、ウルトラマン。できれば、君とはもう会いたくはないな」

「それはどうしてだい？」

「今度会うときは、私が君たちに裁かれるときだろう。……それだけは勘弁願いたい」

「私たちはつながっている。例えば宇宙を隔離していたとしても、君と私との友情は不滅だ。その『ウルトラの星』に誓って」

「……そうだな。ありがとう、ウルトラマン」

「さらばだ、寺島隼魅よ」

ウルトラマンは、赤い光の玉となった。

夜の空を昇って、星となっていく。

それに追従する三つの星の姿も、寺島には見えていた。

遠い宇宙の彼方で、彼らは自分の所属する宇宙に戻るのだろう。

夜空に輝くウルトラの星を、寺島は見えなくなるまで、手を振って見送っていた。

第九話 あの人たちは

その日から、人々の中で少しだけ視方が変わった。
宇宙人は現実に存在する。

しかも、そいつは我々の周りの人間に擬態して生活しているらしい。

しかし、どうやら悪い存在ではないようだ。

彼は創作の中で登場する存在として世間に知られていた。

地球侵略を企む悪の存在として、創作物の中では描かれていた。

人々の認識も、それに沿ったものであり、彼についても人間に害を与えてくる存在ではないかと穿った視方をしていた。

そして、その日行われた日本の国会答弁にて、彼は姿を現した。

彼は人々の想像を裏切り、予想外の言葉を口にした。

彼は、地球侵略など考えていなかった。

彼は理性的な存在だった。

武力的な行為ではなく、政治的な交渉によつて、我々と友好の証を示した。

地球人には、宇宙人を取り締まる法律など存在しない。

宇宙人を罰するための法律も存在しない。

今まで宇宙人の存在など、夢想するだけだったから当然だ。

そんな人々に、彼の方から友好へと歩み寄ってくれた。

彼は私たちを配慮して、光の国の戦士たちを連れてきてくれた。

しかもご丁寧な、彼らを介することで不平等な締結をなくそうとしてくれた。

彼は交渉後、姿を消した。

光の戦士たちも、はるか空の彼方に飛び立っていった。

彼は今も我々人類の中に溶け込んでいるだろう。

昨日までの私たちなら、それは恐怖を呼ぶことだった。

しかし、その時から、人々にある種の安心感が芽生えたのだった。宇宙人は確かにいる、しかし、悪い奴ではないらしい。もちろん、不信感が完全に消えたわけではないが、それでも国会答弁前までの、世の終わりのような雰囲気は完全に払しょくされて、元に戻ろうとしていた。

◇

梨沙はかつてない危機に襲われつつあった。

世間を騒がせた異世界、及び宇宙人の国会答弁の後で、彼女は正気に戻り顔を青くした。

突然だが、明日世界が減ぶとしたら、何をしたい？

そんな問いがあったとしたら、あなたはどうするだろうか？

かつて世紀末には、ノストラダムスの大予言が流行りしたことがあったが、その時も結局明日は変わらずに来たのである。

その時生きていた人は、今の問いを同じように考えただろうか。

彼女の場合は、明日が来ないかもしれないことを嘆き、やけになつて突つ走るタイプであった。

結果、明日は来ることになった。

自棄になった結果として、まず金がなくなった。

元々月末まで食費を切り崩してまで節約していた彼女は、世間を騒がせた宇宙人の侵略騒動により完全に終わったと思った。

彼女が今作っている同人誌も、すべて無駄になるかもしれない。

申しこんだ祭典も執り行われないうちかもしれない。

努力が無駄になることを憂いだ彼女は、とりあえず飲んで食った。

アルコールが回り、その日の昼頃まで眠っていた彼女は、起きてからテレビをつけた。

そこで彼女が目にしたのは、離婚した元夫と、世間を騒がせている美貌をもつ異世界から来た訪問者。

梨沙のテンションがバーストアップした。

ウキウキに中継を見ていた彼女は、続くバルタン星人が登場したところでハッと我に返った。

議事堂内で見られるその姿は、おそらく人々に恐怖を与えることだろう。

梨沙もその一人だった。

彼女の頭が白くなり、書きかけの原稿用紙とテレビをちらちらと往復させた。

もう、終わりなのか…。

ところが、事態は変化していった。

中継される場所が変わり、今度は外の風景が映し出された。

国会議事堂の前には、多数の人々が詰めかけている。

そこに、4つのまばゆい光の玉がやってきた。

それらはカメラで映される中で、ウルトラマンの姿になった。

梨沙もウルトラマンは知っていた。

日本でおそらく上位に入るほどの人気と知名度を誇るヒーローである。

自分は特撮にはそれほど興味はないけれど、そんな彼女も知っているほど有名なのだ。

男の子なら、スペシウム光線の真似をして、両手を十字に組むことは経験をしたことがあるはずである。

巨大なウルトラマンたちは身長を人間台にまで縮小化させると、国会議事堂の中へと入っていく。

人々は彼らの進路を開ける。

まるでモーゼの十戒のように、人の波が割れていく。

再び議事堂内が映され、しばらくしてからバルタン、ウルトラマンたちが並んで座るといふシユールな光景が映し出された。

この時点で、梨沙の頭の中は停止しかかっていた。

バルタン星人が壇上に立ち、話を始める。

日本語上手だね、とよく働いていない頭が思いを浮かべる。

話を聞いているうちに、何となく悪いことを言っていないように感

じた。

侵略行為なんてする気はないよ。私も地球で人間として住んでいるから。だから人間のやることにいちいち口挟まない、その代わりに私が地球にいても何もいわないでね。

そのようなことで、バルタン星人と総理大臣が握手？している姿が映し出された。

カメラのフラッシュがまばゆく輝き、テレビの向こう側では凄いい歓声が聞こえてくる。

「……助かったの？」

梨沙は呆然としたままベッドの上に座り込む。

徐々に現実味を帯びてくる。

それと共に直面する現実。

彼女ははまだ手つかずとなっている机の上の原稿用紙に目を向けた。

頭が急速に冷却されていく。

それと共に、彼女の顔色も蒼くなっていく。

とある部屋から、絶叫が上がった。

それからしばらくすると、涙を浮かべながら机に向かう彼女の姿が見られた。

時間という強敵とも立ち向かう彼女も、やがて限界を迎える。

肉体的、精神的にも限界近い彼女は、恥をかき捨てて応援を呼んだ。

メールを送った先は、離婚した旦那だった。

もはや彼女には余裕すら残っていないかった。

腹の虫は鳴り響き、眠気が頭を揺らし、夢の世界へ招待する。

それでも、彼女は止まるわけにはいかなかった。

そんな彼女の元に、夜中、救いが訪れた。

別れた夫が、彼女の救援に来てくれたのである。

◇

久しぶりに見た伊丹は、女連れであった。

それだけでも梨沙にとつては驚天動地な出来事であるのに、一緒にいた女性たちが国会にも出ていた異世界から来た有名人だったからさあ、大変。

彼女が胸に秘めて隠していたレイヤー魂だったり、着せ替え魂だったり、漏れ出し、一行を遠ざけていた。

何とか伊丹がなだめ、場を落ち着かせると、

「梨沙、テレビ借りるぞ」

そう言つてほこりのかぶつたブルーレイデッキを操作し始めた。

テユカ、ロウリイ、レレイの三人もその様子を興味深そうに眺めている。

若干疲れを見せるピニヤとポーズも、ここに来て落ち着いたのか、同じように腰を落ち着けて黒い画面をみていた。

ちなみに、休息が大切なことを知っている自衛官の栗林と富田は、別室ですでに寝入っている。

伊丹は彼女たちに付き合わなければならなかったため、起きていなければならなかった。

もつとも、今日いろいろありすぎて素早く切り上げるつもりではあるのだが。

彼が黒いバッグの中から取り出したのは、『ウルトラマン』のブルーレイボックスだった。

もともと国会でバルタン対策の資料として使用されていたものだったが、バルタン星人テラーと友好的に接することができたため、必要なくなったのだ。

バルタン星人やウルトラマンの姿を間近で目撃したロウリイ、テユカ、レレイは興奮が抑えられず、彼らが記された文献を見せてほしいと伊丹にせがんだ。

鼻息を荒くし迫ってくる三人に、早く移動したかった自衛官組は、国会においてあったブルーレイを借りて、梨沙の住居にやってきたのである。

さすがに全39話見るわけにはいかず、彼女たちとの協議の結果、

そして、くんずほぐれつプロレスを行うウルトラマンたちが、彼女たちの餌食とならないはずがない。

それまで彼女は、ウルトラマンの番組を見たことがなかった。理由はいろいろあるが、女の子は基本的にウルトラマンを視聴したがない。

もちろん、世の中には好きな人もいるかもしれないが、梨沙は興味を持たなかった人種だった。

彼女の知識は、世間一般で知られているように、胸にカラータイマーがあり、三分間しか変身してられず、腕を十字にして放たれるスペシウム光線が必殺技だ。

そのような認識だったのである。

そして今宵、彼女は見たのだ。

伊丹には彼女がどう見えていたのかわからなかったが、これだけは断言できた。

それは、少なくとも彼が思っているような、健全な男の子が思い浮かべるようなことを、梨沙が考えているわけではないことを。

彼女はふらりと立ち上がり、伊丹から渡された軍資金を手に、夜の街に繰り出した。

これは少し後の話ではあるが、戻って来た彼女はコンビニで買ったであろう大量のエナジードリンクを冷蔵庫の中に押し込むと、先ほどまで進めていた机の上の原稿用紙をゴミ箱に投げ捨て、真っ白な新しい紙を取り出した。

それは……、血を吐きながら続ける、悲しいマラソンですよ……。

そのデスマーチに、彼女は喜んで飛び込んでいったのである。

伊丹は四面楚歌なこの状況に、天を仰ぎ見た。

都会の空には、助けとなるウルトラの星は浮かんではいなかった。

第10話 バルタンレポート1

『セイメイ？ワカラナイ。セイメイトハナニカ？』

もう何度も何度も、この映像を見直している。

『ウルトラマン』第二話「侵略者を撃て！」より、科学特捜隊のアラシ隊員の体を操作していたバルタン星人に対して、ウルトラマンと同一化しているハヤタとの会話の一節だ。

この世界ではウルトラマン、及びそれに登場する宇宙人や怪獣たちは創作であるとみなされている。

しかし、現実には別の世界においては、私たちバルタン星人は存在しているし、ウルトラマンたち光の国の戦士もまた、存在している。

多元宇宙マルチバースはどんな可能性も内包している。

その中で、私たちの世界と、この世界との関係は、どのようなものであろうか。

この世界があったから、私の宇宙が生まれたのか。

私たちの宇宙があったから、この世界が生まれたのか。

この問いは、鶏が先か、卵が先かの論争に似ており、もしかすると答えなどないかもしれない。

しかし、私はこの世界で作成された『ウルトラマン』を見て、思うのだ。

これは実際にどこかの宇宙で起こったことであり、ただのフィクションの出来事ではないことを。

テレビの中で展開されている映像では、母星を失ったバルタン星人の一人が、地球に移住することを科学特捜隊の面々に宣言している。

それを、イデを含めた地球の面々が反対の声を上げる。

移民の問題は、今もなお大きな社会問題として取り上げられている。

ましてや、当時の地球に住んでいる人間の人口と等しいほどのバル

タン星からの宇宙移民を、受け入れることなど、到底望むことができないはずもない。

そのままバクテリアほどのサイズで生きることを選択すればよかったのか？

あなたは、周りを人間よりもはるかに大きい動物たちに囲まれて、安心な生活を営むことができる、思っているのですか？

大きいことは、それだけで他者よりも優れている。

人間がアリの踏みつぶせるのは、人間がはるかに大きな質量を有しているからである。

縮尺が同じならば、人間に勝ち目などない。

人間に拒否されたと思つたバルタン星人は、巨大化し地球を征服しよう、夜の東京の街に攻撃を開始した。

そこでウルトラマンが登場。

彼の体内で製造されたエネルギーは、バルタン星人にとって弱点であるスペシウムに酷似している。

彼が手から放つた光線によつて、バルタンは夢を絶たれ、バルタン星20億3000万の生き残りは、その人生に終止符を打った。

それから、長きにわたるウルトラ族、地球との、我らバルタン星人の因縁が続いていくのである。

これから作成するレポートは、ウルトラマンの行いを非難するものでも、バルタンの選択を揶揄するものでもない。

イノチとは何か、セイメイとは何か。

なぜ、あの時のバルタン星人は、理解することができなかつたのか。それについて、私なりの考察を書き記していきたいと考えている。

この地球で生活し、私は人間を長い間見てきた。

今ならば、その答えが多少なりとも出すことができるのではないか、そう思うのである。



特地にある「^{ゲート}門」。

かつて現地の魔術師たちが作り上げたそれが設置されているのが、アルヌスである。

そしてそこは今、日本の自衛隊により占拠されている。

異世界との初めての接触であった銀座事件よりしばらくして、アルヌスは大きな変貌を見せていた。

異世界との接点であるここでは、自衛隊、特地の住人ともに活発な交流を見せており、それぞれの世界への橋渡しをすることを期待された場所であった。

語学研修、交易、その他もろもろの異世界間交流は、ゆるやかな速度で進行を見せている。

門は、依然として閉じる気配もない。

日本側の目的は、表向きはこちらに攻めいつて来た帝国側の賠償。

交渉は、一朝一夕で進むものではない。

彼らはその優秀な頭脳と、種々の弾丸で戦う所存だった。

ゆっくり、焦らず、じっくりと。

政治家はせっかちではないけない。

交渉事は、じっくり、ねっとり相手を締め上げていくように。

まずは情報を集めるために作った拠点が、いつの間にか異世界間交流の場として大きな発展を遂げていたのである。

特地においても、アルヌスには珍しいものが存在する。

それは緻密な工芸品であったり、美しい織物であったり、闇のような怪しげな色をした漆器であったり、ともかく彼らはそれを欲しがった。

両者の思惑が一致したこの地では、それを求めて人々が四方からやってくる。

今、アルヌスは特地で一番活気あふれた、ホットな場所なのである。



その活気あふれた様子を、デシは遠くから眺めていた。彼の目には、どこか冷めた色が浮かんでいた。

人々の顔には、皆笑顔が浮かんでいる。

人々の口には、皆笑いが浮かんでいる。

それに反して、デシの表情は曇っていたのだ。

彼の心には、ぽっかりと大きな穴が開いていた。

『あなたの父は、もう死んでいたのお』

彼が再び目を覚まし、亜神ロウリイから聞かされた言葉だった。

その言葉は、小さな彼の心臓を強く締め付けた。

彼は激昂した。

胸の内が、燃えているようだった。

お前が、お前がやったんだろっ!!

不敬であることはわかっていたし、断罪されるだろうこともわかっていた。

いや、もしかしたらわからずに、彼女に突っかかっていたのかも知らない。

デシの途切れる前までの記憶では、この黒い死神が彼の父の首を吹き飛ばしていたのだから。

激昂したデシがロウリイを突き飛ばす。

小さな子どもの体とは思えないほど、細腕から力が出ていた。

突き飛ばされたロウリイは、その勢いに逆らわず、ふわりと宙を舞って後方に着地する。

殺意をたぎらせたデシを、周りにいた大人たちが羽交い絞めにする。

抵抗するも、所詮は小さな子どもだ。

取り押さえられ、地面に抑え込まれる。

『聞きなさい、真実を』

彼女の口から放たれたのは、ある種の真実だった。

彼の父、母、妹の家族がすでにあの世に行ったこと。

彼の父は勇敢に戦い、その功績が認められ戦いの神エムロイのもとへと旅立っていったこと。

デシが先ほどまで接していた父は、偽物だった。

バルタン星人という異星人が、擬態していたこと。

デシの頭が真っ白になった。

もう何も考えられなかった。

彼は呆然と立ち尽くし、力なく手を垂れさせた。

ロウリイも周りの大人たちも、その姿を痛ましそうに見ている。

何人かは、顔を背ける者さえいた。

どれだけそうしていたのだろうか。

気づけば、彼の周りに人はいなくなっていた。

彼は自衛隊の仮設住宅で目を開けた。

彼が正気に戻るまで、薄暗い電灯が光る小さな部屋の中で一人、呆

然と立ち尽くしていたのである。

その時から、彼の胸には大きな暗い穴が開いている。

何をしても、誰でもふさぐことができない、底なしの穴が。

その穴が、今でもデシの感情を吸い込んでいるようだった。

感情だけではない。

何を食べても、何をしても、彼の気は晴れないでいた。

食べ物の味がわからなかった。

何を口に入れても、味のないゴムを噛んでいるみたいだった。

見える世界が、すべて灰色に見えていた。

人々の鮮やかに笑う顔も、青色の空も、照り付ける太陽も、すべて

灰がかって見えた。

いまだ、彼は自分の足で立ち上がれずにいた。

空虚な泥の沼にはまり込んで、動けないでいた。



アルヌスには、奇妙な噂が広まっていた。

ここ——特地——のものではなく、別の世界から来た光の神の話である。

その神は、遠い、遠い夜空に浮かぶ星の一つからやってきた。

特地の人々には、「悪魔」の概念が無かった。

特地には神がおり、実際に存在している。

主に二種類に大別され、肉体を持つ亜神と、肉体を持たない正神とである。

大いなる神が司る概念によって、その人の信仰は変わる。

神に上下の区別はない。

平等に存在し、大いなる力で私たちの周りに存在している。

また、信仰する神の名を自らの名に刻み込むことで、その人がどのような神を信仰しているのかわかるようになっていく。

神は偉大なものであり、誰もその神の威光を汚す事など、できないのだ。

あの炎龍でさえ、神の使役物でしかない。

しかし、アルヌスに現れた門、そしてそこから入って来た人々は、違った。

彼らは神の存在に対して愚鈍であった。

それだけではない。

神にあだなす「悪魔」の存在を、特地の人々は知ったのである。そしてそれは、実際に彼らの前に現れた。

あの死神ロウリイ・マーキュリーが手も足も出ずに、かの悪魔にとらえられたのだ。

悪魔が繰り出す御業の数々は、まさに奇跡と呼べるものだった。

分裂し、切られても再生し、巨大化する。

悪魔が怪しげに笑うと、その声に冷ややかなものを浮かべる。彼らの背筋を凍らせ、動きを鈍くする。

何だこれは、そう彼らは思った。

「竜」という絶対者に牙を立てた緑色のジエイタイでさえ、あの悪魔にはかなわなかった。

彼らが持つ鉄の一物から放たれる何かを受けても、悪魔は変わらずに笑っていた。

その嗤いが、人々を底なしの恐怖に落とし入れていく。そして彼らは見た。

空に浮かぶ、彼らの知らない光の神の姿を。

まばゆい光を放ちながら、赤い光が形を変えていく。

その光は優しく、温かく人々を包み込んでくれるようだった。

神はその銀色の体軀を人々の前に見せた。

美しく、神々しい。

人々は恐怖を忘れ、その姿に見惚れていた。

『ウルトラマン』

ジエイタイの人々がそうつぶやいた。

彼らは何か知っているようだった。

悪魔と神が対峙する。

炎龍よりもはるかに巨大な二体の立ち姿は、世の終わりを思わせる光景だった。

彼らが放つ大いなる力を、感応性の高い人々に影響を与える。

苦しむ人々がいる中で、二体の巨人が姿を消した。

突然、何の前触れもなく、どこかへと。

その夜、特地の人々の間では、あの巨大な神と、それと対峙する異形の話で持ちきりだった。

それと、それを知っているであろう緑色のジエイタイの人々のことも。しかし、彼らはまた、ジエイタイの人々交信することが困難なことも知っていた。

彼らは別のところからやってきた。

言葉がほとんど通じないのである。

彼らは我々の言葉を解さないし、我々も彼らの言葉を解すことができない。

「ニホンゴ」とは彼らの話す言葉であるらしいが、特地の人々には理解することができなかつた。

しかしその中でも、彼らの話を聞こうとするものがいた。
レレイ・ラ・レレーナ。

ヒト種の魔導師であり、かの著名な賢者カトーの弟子である才媛である。

彼女は短期間でも、彼らの言葉を学習しつつあった。

彼女はジエイタイの人々から聞いた話を、特地の人々に話してくれた。

もちろん、完全に理解できたわけではないし、断片的な情報しかまだ拾えたわけではない。

それでも、人々はその話をしてくれと、彼女にせがんだ。

曰く、かの神は遠い夜空に輝く星からやってきた存在である。

曰く、かの神と対峙し、人間に害を与える「悪魔」が存在する。

曰く、かの神はその悪魔と戦い、幾度となく世界を救ってきた。

曰く、ジエイタイの人々が住む世界には、その伝説を記した文献が存在する。

ウルトラマンは神ではない。

しかし、限界状況でかの光の巨人の姿を見た人々は、その姿をどう幻視したのだろうか。

そして、「門」の外へと繰り出したテユカ、レレイ、ロウリイの三者から後程告げられた言葉。

かの巨人を賛美する詩。

そして実在する悪魔の存在。

異邦人である光の神は、実在し、私たち人間を、生命を見守っている。

それは特地の人々が初めて触れる概念であった。

異世界の神は、超越的な肉の器を持ち、それと対立する悪魔が存在する。

その大いなる光の力で、私たちを見守り、守護してくれている。

そんな話で、異世界の交流点であるアルヌスが持ちきりなのは、不思議なことではなかった。

ジエイタイが持ち込んだ不思議な「ラジカセ」からは、かの神を讃

えた詩がひとりでに詠まれていく。

メロデイと合わさり、耳に入っていくその詩に、子どもたちは夢中になった。

また、異世界で作られた光の神の様子を描かれた書物。

派手に着色され、丈夫な紙でできたそれは、特地の人々を瞬く間に魅了した。

神と対立する悪魔の姿は、多彩で、人々に恐怖を与える。

しかし、かの光の神が必ずや守ってください。

一人のジエイタイの人が、言った言葉があった。

「ウルトラマンは、絶対に負けない！」

特地の人々は、当時、彼の言葉が理解できなかった。

しかし、彼の力強い握りこぶし、そして希望を宿した表情に、人々は勇気づけられた。

ウルトラマンとは、かの神の名前らしい。

現場にいたコダ村の人々、そして自衛隊と共にアルヌスに残った人々の何割かの中で、ひそかに改宗が行われていた。

今アルヌスでは、ウルトラ教とも言うべき新興宗教が目覚めようとしていたりいなかったりした。

その噂を、別の目的でアルヌスを訪れた一人のダークエルフが聞いていたりいなかったり。

アルヌスに来た人々が口々に語る光の神の話。

それは今、特地全土へと広まろうとしているのだった。

第11話 バルタンレポート2

放映されたウルトラマンとバルタン星人との確執の中で、初代ほど特異なものではなかった。

それ以降、バルタン星人はどこか人間味というか、感情を持っているように感じられる。

バルタン20億3000万の民と共にやってきたバルタン星人は、無機質な目をしていた。

彼は自分の意思を持っていたのだろうか？

というのは、バルタンの発達した科学力が、逆に我々を縛っていたのではないかと思ったからである。

これは自覚がある症状ではない。

『ウルトラマン』が放送されてから、自分で自分に質問してみた結果、私の中に生まれたものだ。

バルタンの科学力は、人間はおろか下手をするとウルトラの科学よりも優れている、まさに超科学の名に恥じない行いをする事ができた。

クローン技術は、我々にとっては初歩中の初歩である。

テロメアの増殖により、私たちの寿命は飛躍的に増大した。

肉体改造、遺伝子組み換え、細胞変異により、我々は宇宙空間、及び放射能の中でも活動ができる肉体を手に入れた。

唯一スペシウムだけが、我々が克服できなかったものだった。

しかし、それも近年の内に何とかなると、我々は樂觀視していた。その結果、バルタンは流浪の民となった。

遠いバルタンの星からやってきたバルタン星人は、なぜ、一人しか活動していなかったのだろうか？

種々の超能力を手に入れたバルタンは、もはや肉体は器でしかなかった。

肉体が滅びることは、死ぬことではない。

卓越したクローン、細胞変異の技術により、いつでも全盛期の器を手にすることができたのだ。

何らかの事故で欠損した個所は、容易に生やす事ができた。

細胞のひとつかけらから、器を万、億に増やす事すら可能だった。

もはや神の処遇、それでもバルタンの民は止まらなかつた。

私たちは超科学という妖しい光に見入っていた。

バルタンの科学によつて、不可能だったことを可能にする。

神秘的だった事象を解明し、自分たちの力とする。

皆が科学を求めた。

そうして長きにわたり繁栄を勝ち取つて来たのだから。

だから気づかなかつたのだ。

誰か、星を滅ぼす要因となつた科学者を止める者はいなかつたのか

？

もう遠い昔の出来事ではあるが、おそらくいなかつただらう。

バルタン星に住む誰もが、科学を求めていたのだから。

私も、そんな哀れな罪人の一人でしかない。

彼を非難する理由は、私にはない……。

しかし、今だからこそ、自分に対して言葉を投げかけたい。

『あなたは同胞が間違つた道に進もうとしているのを、なぜ正してやれないのですか？』

私は死ぬまでの長い長い時間、この罪を抱いて生き続けるだらう。

それは呪いにも似たものだ。

運命の日、私の目の前で起こつたあの光だけは、一生忘れることができないうだらう。

◇

日が暮れ、夜が来るかもという時間帯。

アルヌスの一角に設置されたオープンテラスでは、奇妙な緑色の一団があった。

日本から来た自衛隊員である、伊丹、黒川、桑原。

そして、亜神ロウリイ・マーキュリー。

ビルの大ジョッキが人数分机の上に置かれ、それを皆がもち口々に話そうという態勢だった。

「……で、話つてのは？」

伊丹が切り出し、それを受けて対面に座っている黒川が話し始めた。

彼女の口から吐き出されたのは、今もなお幻影を追っている二人の話だ。

エルフであるテユカと、デシの話。

テユカは架空の父の幻影を追っており、デシに至っては自分の殻に閉じこもって出てこない。

一応、食事や睡眠はとれているようではあるものの、これ以上この生活が続くようでは、いずれ体に支障をきたすだろう。

もしくは、割れ物のように壊れてしまうときが、もうすぐに来ているのかもしれない。

黒川は「現実」を認識させてやるのが大切だと言った。

テユカにも、デシにも、きちんと失った者を認識させ、そのことを乗り越えていかなければならないと。

正論であった。

しかし、正論がまた、正しくない時だってあるのだ。

彼女はまだ若い。

正論がまた本人にとっての毒となることだってあるのだ。

そのことを、彼女は伊丹から諭された。

現実を認識した、テユカやデシがどうなってしまうのかはわからない。

結果壊れてしまった場合に、彼女にはどういう責任も取ることができなかった。

放っておくと、伊丹は突き放した。

時には、そういうことが必要な時もあると。
時間という大いなる力に任せろと。

黒川は不服そうではあったが、その場は引き下がった。

「……そういえば、ロウリイさんにお聞きしたいことがありました」
「なあにい？」

「真実を隠すことが、時には必要ならば、どうしても、あなたはデシに真実を教えたのですか？」

「ああ、そのことお……」

「彼にも、テユカのように黙っておけばよかったのではありませんか？むしろ真実を話したことで、状況を悪化させてしまったのでは？」

今もなお、幽鬼のような表情でさまよっているデシ。

彼もまた、父や彼の家族の幻影を追っている。

あの日、ロウリイから語られた真実は、デシを大きく打ちのめした。
そして、あの日までそばにいた父が、偽物だったことも。

どうしてもあの場にバルタン星人がいたのかは、彼らにはわからない。
い。

しかし、かの父が宇宙人の擬態によるもので、本物はすでに死んでいると、彼は信じるができなかった。

ロウリイは自らが崇める神の名をかたった。ならば、嘘を言うはずがない。

では、彼女はなぜ残酷な真実を語ったのか？

「あの子には、受け継いでほしかったのよお」

「受け継ぐ？」

「人間の一生は短い、その中で、どんな生を謳歌するのかなのお。私が崇めるエムロイの神は、人間のどんな性でも容認するの。強盗でも、殺人でも、どんな下劣なことでもねえ。でも、問題はそれをどんな目的で、どんな態度でそのことを行つたかなのよお。兵士や死刑執行人が首を切り落として、何が悪いのお？彼がその職業を選択し、彼なりの誇りをもってその大業に挑むこと、それが必要なのお。偉大なるエムロイはすべてを容認するわあ。彼の元へ魂が送られていったということはあ、デシの父親もそれだけ誇りをもって死んでいったという

ことなのお。その意思を、彼には継いでほしいのよお」

「……しかし、いくら何でも重荷すぎませんか？彼はまだ幼い、もう少し大きくなってからでも……」

「明日が来るかは、わからないじゃない。……ねえ、思ったのだけれど、あなたは何でもできると、思い違いをしていないかしらあ？」

「そんなことはありません！人間には、不可能なこともあります。それを自覚した上で、できることをしようと——」

「そうかしらあ？あなたたちの世界では、死ぬことは稀であると聞いているわあ。——この世界ではねえ、人間が生きていくには、大変なことがたくさんあるのよう」

例えば、炎龍。

古代龍である赤い悪魔は、まさしく災害が具現化したようなもの。

その獐猛で、巨大な口に噛まれれば、即座に肉をえぐりだされる。

まさに、動く災害。

それも、人々を狙い定めてくる。

また、衛生管理、医療技術が現代日本ほど確立していない特地においては、いまだ呪術による迷信的な信仰が広がっている。

唾を付けとけば治ると、聞いたことはないだろうか？

本来ならば、つばに含まれている細菌で感染する可能性があるため、流水で傷口を洗い流すことが正解なのだが、今もなお各地で残っている迷信のたぐいであろう。

昔は、7歳までは神の子と呼ばれることがあった。

赤子の出生率、及び赤子が大きくなるまでに何らかの要因で死んでしまうことが多かったため、7歳までは神の選択に任し、それからは人間の幼児として、大人になるためのしつけを行うということである。

科学技術の発展によって、人間は寿命を延ばし、病気を克服し、死から遠ざかって来た。

ましてや、地球にはドラゴンなんて空想の産物は存在せず、外敵が存在しないのである。

武器を開発したことで、身体能力で劣る獣に対しても、有利に戦うことができるようになった。

もはや、人間の敵は人間のみとなったのである。しかし、特地は違う。

前近代的な彼らの生活は、まさに苦難の連続だ。

地球ほど便利なものに囲まれているわけではないし、地球よりもはるかに凶暴な獣などに取り囲まれている。

死が、すぐ隣に、近くに存在しているのである。

冥府の神ハーデイや、戦いの神エムロイが多くの信徒を獲得しているのも、この辺が理由の一端であるだろう。

私たちは、死んでいった先に何があるのか知らない。

わからないといったほうが正しいか。

肉の器から分離し、魂が次にどこに行くのか？

天国か、地獄か？

そもそも魂なんてものは本当にあるのか？

霊界、天界、種々の場所が本当に存在しているのだろうか。

そこは死んだものしかわからず、文字通り神のみぞ知る世界なのだ。

しかし、特地には神がいる。

多くは、冥界を司ると言われているハーデイの元へと、死後の魂が行くことになっている。

それは肉の器を持った亜神によって伝えられる。

亜神が人よりも超越的な力を有した存在であることは、特地の人間にとつては明白な事実である。

そして、肉から解放され、この大気中漂う神の存在もまた、証明されている。

当然、死後のことについて考えることがあり、死と表裏一体の生についてもまた、大いに考えるべき事柄である。

彼らは懸命に考えている。

いつ自分が死ぬかわからない世界で、どう生きることが正しいのかということ。

正解なんてないのかもしれない。

それでも、彼らの生がちつぽけなものではなくなるように、日々努めているのである。

ロウリイが感じた違和感は、このようなものだった。

「門」の先には、確かにこことは違う繁栄があった。

彼らは「カガク」の力を使うことで、特地の人々よりも知識や、技術においてはるかに勝っている。

しかし、彼らは何か、重要なことを忘れてはいないか？

彼女は、戦の神エムロイの使徒である。

死後のほとんどを司るハーディとは違い、彼の元へと召される魂は、気高く戦い命を落とした戦士たちであった。

彼らが流した血や汗は、彼の神のもとへと召されたことによって、意味があるものとなったのだ。

彼らの生は、報われるものとなったのである。

エムロイの使徒として祝福し、それを子へとつなぐことは当然のことだと思っている。

誰が彼の偉業を称えるのか？

誰が彼の死の意味を知るのか？

ヨタの死は、痛ましいものではあるものの、エムロイのところへと召される気高き輝きを見せたのだ。

常識の差か、文化の差か……。

黒川とロウリイの意見の対立は、異なる二つの世界の衝突にも似ているようだった。

話は、黒川が退席したことで一時中断となった。

一同はとりあえず、時間的な解決を願ったのだった。



デシが朝、鈍い体を起こすと真っ先にみるものがあった。

部屋の片隅にひっそりと置かれた、彼の父の剣。

鈍い銀の刀身は、革の鞘で隠され、今は見ることは叶わない。持ち主がいなくなった牙は、何も言わず、沈黙を保っている。これがあれば、戻ってくると思っていた。

笑顔の父が、頭をかきながら取りに帰ってくるのである。

今は亡き日常的一幕だ。

しかし、彼は唐突に現実に戻される。

もう、この鋼を扱う男はどこにもいないのだと。

デシは重い体を引きずつようにして、剣に近づいていった。手に取ってみると、ずっしりとした重量を伝えてくる。

しかし、以前ほどの感動は、彼の胸には現れなかった。

ぽっかりと開いた深淵へと続く穴が、彼の感情を喰らってしまった。いるのである。

彼はそつと、鋼を地面に置いた。

担い手を失った剣は、果たして誰の元へと行くのだろうか。

デシはそのまま、薄暗い部屋の中でぼんやりと宙を眺め始めた。

彼の日課は、ジエイタイの人が食事を手渡しにくるまで続くのだ。た。

第12話 バルタンレポート3

私が誕生したときには、バルタン星人の種々の超能力はすでに備わっていた。

テレパスによる深いつながりは、バルタンの社会を大きく変えていた。

かつては、バルタン星にも「文字」や「言語」が存在していた。しかし、テレパスによる感応は、それをはるかに超える伝達速度、正確さを私たちにもたらした。

現代の人間たちと同じく、科学による効率化を求め続けた私たちは、他人という隔たりを消そうとした。

その結果として、テレパスによる感応を選んだのだろう。

プライバシーは必要とされなかったのか？

どうだろう、少なくとも人間たちが恥部だと扱うことは、バルタンの科学によってほとんど解決されていた。

生理的現象、性的興奮それ自体への見方が変わっていたのである。寿命が延び、クローン技術による肉体再生技術が確立していくと、私たちは個体数を増やす必要性が感じられなくなった。

むしろ、ポンポン増やすことで、食糧難や土地不足を招き、かえって非効率となりうる。

足りない分はクローンで増やせばいい。

この辺りの考えが、私たちの性的欲求を減少させていったのだろう。

種々の超能力は、私たちの身体にも変化を及ぼした。

両腕の大きな鋏は、その名残であるように思う。

手を道具として扱うことは、どこか精密さに欠けてしまう。

「手」の熟練は、長い年月がかかることである。

私たちは、この不便な道具に頼らない道を選んだ。

人間たちは機械を使っているが、私たちは超能力を使用している。頭に思い浮かべたイメージ通りにテレキネシスで動かせばいいのである。

もちろん、機械も使用しているが、多くは機械それ自体に任せるのではなく、私たちの精神感応とリンクさせ、操れるものであった。

『ウルトラマン80』で登場したバルタンの宇宙船も、彼の精神感応に対応した動きを見せていたように思う。

億を超えるバルタンの人々が精神感応をつなげることで、それ自体が一つの大きな意思となった。

私たち一人ひとり、一滴の水の粒である。

それが集まって、大きな湖を形成していた。

私たちが群体であると言われる所以であるように思う。

私たちは個人というものがなかった。

大いなる意思に導かれるままに、全員が目的に向かって力を合わせていた。

それが切れたのが、一つがああ爆発であり、もう一つはウルトラマンとの決戦の時であった。

私はそこで初めて一人になった。

この広い宇宙で、青い星に一人取り残され、仲間を探し続けた。

この宇宙に、バルタン星人の居場所はない。

初代以降のバルタンは、私と同じ思いを抱いたのだろうか。

彼らは呪縛から解放され、何を思ったのだろうか。

彼らが抱く「怒り」、そして地球侵略への「欲望」こそが、バルタン

の大いなる意思からの解放を意味していたように、私は思う。



ベルナーゴ神殿。

冥府の神ハーデイを祀る神殿都市である。

特地の人々の死生観というものは、死後の多くが冥府へと導かれると信じられている。

そこで、ハーデイによる審判を受けるのである。

死後の魂は、一部例外としてエムロイなど別の場所へと行くことがあるが、それはあくまで例外。

その多くがこのハーデイの元へと招かれる。

そのため、特地の人々の大半は、ハーデイに対する信仰を忘れない。

ハーデイの祭壇は、その地の地下深くに安置されていた。

地上から逆三角形のピラミッドの形で伸びる穴は、彼女の支配領域を示している。

ハーデイの祭壇の前に、青い肌をした女性が一人、立っていた。

死神を連想させるような鎌を持ち、白色のゴスロリ風の衣装に身を包んだ彼女は、何やら独り話しているようであった。

「了解つすよ、主上様。亜神ジゼル、必ずやお姉さまを、主上様の元へとご招致致しますわ」

ジゼルと名乗った女が、祭壇に向けて言葉を交わす。

傍らで見ている分には、彼女が何やら独り話しているようにしか見えなかった。

それでも、彼女は見えない何かと交信しているようだった。

「は、もう一件？いい、いえ、もちろん主上様のお願ひならば、断ることなどいたしません。何でも、私に言ってくれて——」

見えない何か、彼女に指令をもたらした。

それに了承した彼女が、頭を垂れる。

「了解しました。主上様の元に、必ずや二人をお連れしますわ」

若干固いが、恭しくも頭を下げた彼女の後ろで、パリパリと何かが割れるような音が響き渡る。

彼女の口元が三日月の形に変形し、それと呼応するように後ろから鳴き声が発せられる。

赤と黒の狂獣が、鎌首をもたげる。

「——亜神ジゼルにお任せを」

冥神の使徒が、死の鎌を肩に担ぎ、狂獣と共に旅立つ。

ターゲットは、黒の死神と、異邦人。
赤と黒の力を侍らし、彼女は飛び立った。



その日は、雨が降っていた。

しとしとと降り続ける中、デシは相も変わらず部屋の中をぼうつと眺めていた。

自衛隊の仮設住宅の一部屋では、電球もつけず暗い部屋の中で一人、こうしている。

初めは何人か、彼のことを心配して見に来てくれる人がいたが、もう誰も彼の様子を見には来ない。

自分たちでは力になることができないと、わかっているのだ。

デシが人と会うのは、朝昼夕の食事の時だけ。

それ以外は、一人こうして部屋の中で虚空を眺めている。

零れ落ちていく、何もかも。

ぽっかりと開いた胸の黒い穴から何もかも。

しかし、転機は突然に訪れる。

コンコンと、ノックする音が聞こえた。

デシは反応もしなかった。

代わりに、返事を待たずに扉を開ける音がした。

入って来たのは、緑色の自衛官二人と、褐色の肌と銀の髪を持つ
ダークエルフの女性。

自衛官たちが、何と言ったのかは、デシには聞こえなかった。

目の前の彼らは見えておらず、相も変わらず虚空を見ている。

ダークエルフの女性が、デシの両腕を掴んだ。

彼女は叫んでいた。

悲痛な表情を浮かべて、すべてを失う覚悟を以って、その少年に思
いを伝えている。

ある種の狂気が、彼女を突き動かしていた。

自衛官二人はぎよつとして、彼女を止めようとしている。

それよりも先に、デシが反応していた。

彼の瞳が定まっていく。

白かった顔をさらに白くし、彼は悲痛の音を奏でた。

それはおおよそ人が出せるような声ではなかった。

それは聞いている人々を突き刺すような威力を持っていた。

彼はあの日、あの夜の記憶を封じていた。

それは子どもながらの、防衛機制だったのかもしれない。

バラバラのまま記憶の奥底にしまっていたパズルが、今彼の中で組

み立てられていく。

それは悲しい現実。

それは恐ろしい出来事だった。

『「アクマ」はどこにいる?』

ダークエルフが発した疑問だ。

デシは「アクマ」という言葉の意味を解さなかった。

特地には、馴染みがない言葉だったからだ。

しかし、その言葉をピースとして、彼の中のパズルが組みあがって

いく。

『炎龍よりも恐ろしい』

『お前も襲われたのだろうか?』

『二つの大きな目』

『神に対立する異形』

そのようなキーワードから、ある光景が浮かんでくる。

それは悲しい記憶だった。

あの夜、デシは死を覚悟した。

炎の中、父の剣を抱く自分。

そして、後方から忍び寄ってくる巨竜。

開かれる牙、むせかえるような血の匂い。

そして、「アクマ」の囁い声。

アクマはこちらを見ていた。

片目に突き刺さる矢が、えぐれた左腕がその証拠だ。

遠いところから流れてきていた噂に、「緑の人」のうわさがあった。ダークエルフたちもその噂を聞き及んでおり、彼らに助けを乞うたのである。

一族の遣いの者として、ヤオが選ばれたのだった。

アルヌスにたどり着いた彼女が抱いたのは、まずは驚きであった。そこには、彼女が見たことも、聞いたこともないような鉄の武器が使われていたのである。

その音が、その威力が、彼らの力を示しているようであった。なるほど、これならばあの炎龍も――

彼女の中で確かに芽生えた希望という光。

それは、次の瞬間にガラガラと音を立てて崩れていく。

シユワルツの森は帝国との国境を越えた先にあった。

ジエイタイの人々は現在、帝国と戦争の最中である。

その中で、国境を安易に超えることなど、認められないというのである。

彼女は縋った。少し、ほんの少しの助力で良いのです。

しかし、返事はNOだった。

希望を打ち砕かれた彼女は、悲嘆に暮れた。

しかし、いつまでもそうしているわけにはいかない。

故郷には彼女の帰りを待っている一族の者たちがいるのである。

大命を帯びた彼女は、一度拒否されただけでへこたれるわけにはいかないのである。

そこで彼女は、ある布石を打つことにした。

それは「アクマ」のささやきだった。

しかし、もはや後がない彼女は、手段を問わなかった。

例え罵られても、八つ裂きにされても任務を遂行する。

そんな妖しい光を瞳に宿しながら、彼女はアルヌスの街を散策した。

彼女が緑の人――つまりは自衛隊の人々を探す間に、アルヌスで聞いて回るうちに、わかったことがあった。

一つは、自衛隊のこと。炎龍を退けたその力を動かすには、どうすればよいのか。

もう一つは、その自衛隊ですら叶わないような絶対的な力を持った存在。

それは空からやってきた。

それは人類にあだなす存在。

異世界の神はその存在と戦い、そして勝利するという逸話。

「アクマ」の概念を、ヤオはそこで初めて知ったのである。

信じられなかった。

彼女たちの常識では、神に逆らおうなどというものが存在することなど、ありえなかったのである。

神は平等である。

大いなる力を有した特地の神々は、その有した権能を行使し、この世界を形作っている。

その箱庭の中で、ヤオ達ヒト種や動物、植物たちが暮らしているだけなのだ。

死は万物に訪れるし、生もまたしかり。

神は隔絶した存在と、信じられているのであった。

しかし、異世界から来た神は違うようである。

彼は遠い夜の星からやってきて、私たちのために戦うのだ。

「アクマ」はこの星を狙ってやってくる、それを許さない存在なのだそうだ。

正と負、善と悪のような対立を、ヤオは聞いたのだった。

その光の神は今何処に？

ヤオは人々に聞いて回った。

多くの人は、知らないと言った。

自衛隊の人々は、空の星に戻っていったと答えた。

——では「アクマ」は？

文字通り、ヤオは悪魔に魂を売り渡そうとしたのである。

神と対立するほどの力を持つものならば、炎龍を退けてくれる。

彼女には、その後どうなるかという想像をする余裕がなかった。

追い詰められた彼女は、ある噂を聞いた。

どうやら、一度異世界の神と悪魔は、この地に現れたらしい。

そしてその前に、あのロウリイ・マーキュリーと戦闘になったらしい、と。

話を聞いていくうちに、ある少年に行き当たった。

その少年と「アクマ」は、何らかの関係があるらしい。

少年は今、閉じこもっている。

詳しいことはわからないが、その「アクマ」のせいではないか、という噂だった。

そうして、ヤオは少年の元へとたどり着いた。

まだ年端もいかないヒト種の子どもだった。

目の焦点はあつておらず、暗い部屋の中で一人、虚空を眺めている。

痛ましいと思った。しかし、止まれなかった。

自衛官たちが優しく語りかけているのを待たずに、ヤオは少年に詰め寄った。

——アクマはどこにいる？

変化は劇的だった。

少年の口から、恐ろしい声が上がった。

くしゃやくしゃになった顔からは、生気を感じられなかった。

しかし、それでもなお、目には力が宿っていた。

そして、おぞましい負の感情も。

間違いない。

彼は、「アクマ」を知っている。

彼女が待ち望んでいた変化が起こっていることを、確かに予感していた。

彼女の中には、今、まぎれもなく悪魔が棲んでいた。

彼女の濁った瞳には、現実の光景を正しくは写してはいなかった。

◇

走れ。走れ。走れ。

デシはわき目も降らずに走った。

彼の口からは、荒い呼気が吐き出される。

胸の内が熱い。

何やら、奥底から熱いものがこみ上げてくるようであった。

それは粘り気のあるもので、どんどん頭の方へと昇っていく。

走っていないと、それに全身が侵食されるようだった。

息とともに、その熱いものも吐き出される。

ものすごいエネルギーが、彼の胸の内から生み出されていた。

何だ、何だこれは？

その疑問に答えることができずに、デシは走り続ける。

やがてたまらず、地面に体を投げ出した。

苦しいが、何かから解放された気がした。

しかし、また別のナニカが、彼を縛っていく。

それはどす黒い、へばりついたナニカだ。

「お主、何をやっとするんじゃ？」

いつの間にか、デシの近くに来ていた老人が尋ねた。

彼は義足をつけた足を引きずりながらも、ここまで来たらしい。

デシは体を起こした。

依然として、彼の体からはものすごいエネルギーが生まれているようだった。

足は疲れているが、まだまだ動く。

「———なんという目をしている」

老人はデシの中でくすぶっている黒い炎を見た。

彼の長い人生の中で、幾度となくその炎を宿した者を見てきた。

多くが、破滅した。

目的を達成した者たちも、残りの人生は悲惨だった。

それをまだ小さな子が、復讐という名の炎を宿しているのである。

やめろとは、言わなかった。

言っても無駄なことは、老人にはわかっていたからである。

「坊主、力が欲しいか？」

ピクリと、デシが反応した。

その反応に気を良くした老人が、優しく語り掛ける。

「儂についてこい」

そのようなことを言った。

デシは首肯した。

彼の胸に宿ったエネルギーが、老人によって行先を得たのであった。

第13話 バルタンレポート4

バルタンの大いなる意思からの解放によって、バルタン星人各々が違う道を歩んでいくこととなった。

「怒り」を抱いた者がいた。

人体改造で胸部にスペルゲン反射光を埋め込み、ウルトラマンに戦いを挑んだのだ。

彼の者が抱いた復讐の炎は、一体どれほどのものだったのだろうか。

私には、想像するに余りあるものだ。

続くバルタンも、狡猾な作戦を用いてウルトラ戦士に勝負を挑んだ。

まことに怪奇な「ビルガモ作戦」にて、一時はウルトラマンジャックを罠にはめることに成功した。

なぜ、初代ウルトラマンではなく、その後続で地球にやってきたウルトラマンジャックに挑戦したのだろうか？

おそらく、彼の怒りは初代ウルトラマンだけではなく、ウルトラ戦士全員に及ぶほどになっていたのだろう。

怒りは、眼を曇らせる。

彼の目はもはやウルトラ戦士を見間違えてしまうほどに、曇ってしまっていた。

ビルガモ作戦が失敗に終わった彼は、結局生き残ったのだろうか。できることなら、彼は生き残ってほしいと思う。

テレビでは、ウルトラマンジャックが彼の去り際に浴びせたスペシウム光で、生死不明となっている。

彼は今もなお、別の宇宙で生き残っているのだろうか。

もしそうなら、復讐を忘れて違う道を進んでいてほしいと思う。

バルタンの大いなる呪縛から抜け出した彼が、再び復讐という名の鎖に縛られることなど、到底容認できるものではない。

彼はまだ若い。

バルタン星人としての人生は、まだ始まったばかりだ。

できることなら、曇った眼で様々な事柄を見て、思案して欲しい。それが彼の曇りを取り除くことだってあり得るのだ。

復讐の黒い感情だけが、彼を突き動かす原動力となることは、悲しすぎる。

バルタンの大いなる意思から解放された今、私は個人としての感情を得た。

初めは、自分自身で選択し、行動することに戸惑いを感じた。

それは川の流れに身を任せていた魚が、各々で勝手に泳ぎだすことに似ていた。

流れに逆らって泳ぐことに、どこか怖さを覚えた。

その意味では、私はまだ赤子のようだった。

それから幾年か経って、私は地球人に擬態しながら、彼らの感情を観察し続けた。

私の親はもういない。友も、家族も。

私が感情を、意思を学んだのは、人間の行動からだ。

彼らの行動には、大部分が合理性を欠いたものだった。

発達した科学と緻密な脳を持つバルタン星人にとっては、彼らの行動は理解しがたいものだった。

それでも、彼らの行動を観察していくうちに、私は感情というものに興味を惹かれていった。

喜怒哀楽、彼らは笑い、怒り、嘆き、そして楽しんだ。

私はそこで、初めて自由であることを認識した。

バルタンの民はテレパスによってつながることで、感情を抑制していた。

なぜか、それは合理的ではないからだ。

感情に振り回されていては、群れとしてまとまることができない。

思想が増えていくにつれて、人間たちは争いを拡大していった。

私はその光景を横から眺めていた。

合理的ではない、感情的な彼らの行動は、バルタンの常識からいえ

ば合理性を欠いている。

それでも、彼らの行動が私の戸惑いを解消してくれるように思った。

長い時間を経て、私はようやく、バルタン星人の一人として生きていくことを決めることができたのだ。

◇

伊丹は炎龍を討伐するために、シユワルツの森へと向かうことを決めた。

現在、彼を含む討伐隊の面々は、6人。

心を病んだエルフのテユカ。

魔法によるサポートを願い出た魔導師、レレイ。

伊丹を脅して無理やりついできた死神、ロウリイ。

シユワルツの森からやって来たダークエルフのヤオ。

そして、形見の鋼を両腕に抱えて座り込んでいる、デシであった。

伊丹たちが出発する前に、彼の前に二つの人影が姿を現した。

一人は、伊丹がソーシャルワーカーのところへと足を運んだ時に見かけた老人だった。

片腕に義手をつけ、片目には黒色の眼帯をしている老人だ。

いかめしい顔や筋骨隆々な身体には、幾重にもつけられた傷跡が見えた。

もう一人は、父そして家族を失ったデシだった。

伊丹はもう長い間彼の姿を見ていなかった。

その日再び彼を見かけて、愕然とした。

レレイやロウリイも、その変化に目を見開いた。

彼の身体は傷だらけで、薄汚れた包帯が幾重にも巻かれていた。

彼の頬がシユツとしていたのは、食べなかつたことが原因だけではないだろう。

子どもじみた、ふつくらとした丸顔は、幾分か肉が削げ落ちて大人の顔つきになっていた。

ズボンから伸びる足は、細くカモシカのようにだった。

何より雰囲気、彼を一段、二段と大きく見せていた。

『こいつも一緒に連れてってやつてくれんか？』

老人が伊丹に提案した。

伊丹はしぶった。レイやロウリイならともかく、デシはまだ子供であり、ろくな戦力にならない。

むしろ、足手まといであり、無駄な屍が増えるだけである。

彼が今から向かうところは、必ず勝てることを約束できるような、甘っちょろい場所ではないのだ。

伊丹は老人に尋ねた。

彼は、伊丹たちが何と戦いに行くのか知っているはずだった。

炎龍に家族を殺されたテユカのこと、それを撃退した自衛隊の戦力をあてにしてアルヌスにやってきたダークエルフのヤオのことも有名である。

老人もその噂を聞いており、彼女たちを傍らに侍らし装備を整えている彼がどこに行くのか、容易に想像できたはずである。

『こやつはな、今から死に行くのよ』

『死んで、生まれ変わるために行くのだ』

『人間には、それが必要な時がある』

『それがたとえ、どんな結果になったとしても、だ』

伊丹はそう言った老人から視線をはずして、横に侍っていたデシの方へと顔を向けた。

彼の瞳には、妖しい、暗い光が灯っていた。

彼の瞳は、まだ見ぬ悪魔の姿を映していた。

彼の表情は引き締まり、決意を表していた。

『いいんだな？』

デシはうなづいて、伊丹の傍まで歩いていった。

レイやロウリイから、非難の視線を浴びたが、伊丹は何も言わなかった。

代わりに、彼はデシに、

『逃げてもいいんだぞ』

そのことだけを伝えた。

デシは何も言わなかった。

ただ黙して、彼の父の形見の剣を腕に抱き続けた。

『よかったのお?』

ロウリイが後から聞いてきた疑問に対して、伊丹は苦い顔で、

『……知らねえよ』

そう応えた。

もともと、テユカのことだけでも精一杯なのに、その上デシまで背負うことなど、彼にはできなかった。

デシの瞳は今、曇っていた。

その曇りの中に、暗い炎が宿っていることを、伊丹は確かに見た。

黒い、黒い炎である。

それが絶え間なく燃え上がり、デシの心を蝕んでいるのだ。

逃げてもいいというのは、彼がデシに作った逃げ道だ。

伊丹としては、そちらを選んでくれた方がいい。

炎龍を見て、恐れをなして、しっぽを巻いて逃げ出してほしかった。

その方が、面倒事が少なくて済む。

炎龍に襲われたから、しっぽを巻いて逃げ出すことを選んだとし

て、誰が彼を侮蔑の表情で嗤うだろうか。

伊丹が告げた言葉で、多少なりともデシの心に後方への道が意識されたことだろう。

ひどい人お、とロウリイが言った。

口元が三日月の様相をしていた。

うるせえと、伊丹は彼女の言葉を切った。

これから向かうのは、死地である。

異世界よりも進歩した武器を持つ自衛隊でもなお、そのことは変わらない。

彼に余裕など、もとよりありえなかった。

ただ、彼には帰るべき場所がある。

祭典がむちやくちやにされ、行くことができなかつた彼は、来年こそはと再戦を誓っているのである。

それまでは、死ぬわけにはいかなかった。

彼が求める場所、彼が求める物のために、彼は死地へと赴くのである。

◇

あの日、日常を奪つた悪魔への復讐こそが、デシの原動力。

その感情はデシに素晴らしいパワーを与えていた。

老人——デュランと名乗つたあの男は、デシに厳しい修練を課した。

怒声や罵声も浴びせ、彼を非難した。

それを、デシは歯を食いしばり耐えた。

嘔吐するまで走り続けた。

腕が上がらなくなるまで剣を振り続けた。

あざがひかなくなるまで殴られ続けた。

その光景を見ていた良識のある大人たちは、デュランを非難し、やめさせようとした。

しかしそれを止めたのもデシだった。

普通のことでは、駄目なのだ。

デュランが大人たちに言った言葉だ。

長い時間をかけて鍛錬を施し、適切な師匠のもとで修練を行うことで、確かにデシは強くなれるかもしれない。

しかし、デシには時間がなかった。

怒りの炎は、デシを突き動かし続ける。

その行動は、危ういものである。

現在は強くなるという目的を果たすためにエネルギーを使っているが、少し強くなると一人で炎龍の元へと駆け出していきかねない。

それほど、デシの眼は濁っていたのである。

曇っている彼には、道は正しく見えてはいなかった。

今はデュランが手を引いて、導いてやることしかできていなかった。

しかしいつまでも彼の老人の手でひかれっぱなしというわけにはいかない。

ならば、短時間でも、最低限の戦士に育て上げねばならない。

デュランはそう言ったのだ。

大人たちは納得ができなかったろう。

まだ幼さの残る、未来ある若者をわざわざ死地へと送り込むことなど、到底容認できるモノではない。

大人たちの言葉に、デュランは吼えた。

『未来あるだと？ お前たちはこいつの今の姿を見て、本当に未来があると思っっているのか!？』

汗を垂らし、血を流し、体をいじめながらも邁進していくデシの姿は、痛ましかった。

それでも前へ、前へと進んでいく彼は、確かにどこかおかしかった。

その道がやがて破滅に行きつくとは知っていても、デシは止まれなかったのである。

止まればそこで、黒い炎に飲まれてしまうと、子どもながらにわかっていたので。

デュランはそのことを見抜いていた。

それは彼の長い戦場での経験からだった。

デュランが与えたのは、武器を振るうための最低限度の筋力と、走るための体力だ。

デシは出発するまでの短い間、主に走ることだけをデュランに課されていた。

それは戦に必要不可欠なものともう一つ、逃げるための武器だった。

老人はデシが止まらないことを理解していた。

そのために、彼にもう一つ選択肢を与えていたのである。

そして今、デシは悪魔と対面した。
悪魔は空からやってきた。

伊丹たちが、ダークエルフが潜んでいたロルドム渓谷にたどり着いてからしばらくして、炎龍が獲物を求めてやってきたのである。

ヒトよりもはるかに大きな体躯を備え、翼を兼ね備える空の王者。その牙は捕まったら最後、獲物を黄泉まで容易に連れて行ってしま

う。
さらにその獰猛さ、凶暴さ、雑食性こそ、ヒトをエサとしてしか認識しない証である。

それゆえに、明確な脅威であった。

生き残っていたダークエルフたちが矢を放つが、ダイヤモンドに次ぐ強靭さを持った竜のウロコには傷一つつけることは叶わない。

彼の蛇の口から放たれた炎は、ヒトの身体を容易に焼き尽くすだろう。

しかし、彼らは恐れなかった。

炎龍の左目には、矢が突き刺さっている。

炎龍の左腕は、緑の人が放った爆発する武具によって、半壊している。

傷を残せるなら、血を流すなら殺せるはずだ。

そう思っ、彼らは渓谷に潜んで待っていたのである。

そして、時は来た。

彼らは小さな牙を、炎龍に突き立てたのである。

ロウリーの斧が、必殺の威力を以って炎龍を吹き飛ばした。

レイが放った魔力の波動が、炎龍に次々と襲いかかっていく。

その中で、デシは一人呆然と立ち尽くしていた。

彼の脳内では、あの日、あの場所で感じた恐怖が、明確によみがえって来た。

彼のそれまで燃え上がっていた黒い炎が、一瞬にして鎮火してしま

う。
代わりに、恐怖という名の沼によって、彼は足から囚われてしまっ

ガタガタと震える身体を止めることができなかった。
カタカタと歯を鳴らすのを止めることができなかった。
ズブズブと沈んで動けなくなる脚が言うことを聞かなかった。
両手で構えていた鋼の重さが、本来のものへと戻っていく。
魔法が、切れた。
動悸が激しい。息が断続的に発せられる。
彼を突き動かしていたものすべてが、ガラガラと崩れ落ちていっ
た。

こんな、こんな化物を相手にするのか？

——無理だ。

そう彼は放心した心で思った。

彼は血も、汗も流してきた。

この時のために、身体を苛め抜いてきたのである。

これは賭けでもあった。

デシの身体が途中で力尽きてしまえば、それまでの賭けだ。

彼はその賭けに勝った。

そしてここにいるのである。

覚悟もしてきたつもりだった。

デュランからは、勝ち目の薄い、無謀な戦いであるとも話は聞いていた。

それでも、それでもと、ここまで来た。

その積み上げた覚悟が、一瞬で、音を立てて崩れ去ったのである。

レイとロウレイとの交錯から立ち直った炎龍が、ぐるりと辺りに視線を落とす。

デシとも、視線が交わった。

その恐怖の色を読み取ったのであろうか。

炎龍は空中で方向を変えると、デシの元へと駆けていった。

翼を広げ、超スピードで飛行する。

デシは動けなかった。

彼は世界がスローになるのを自覚した。

その中で、少しずつ近づいてくる死の顎をまじかに見ながら、彼は

彼の人生を思い出していた。

父、母、妹、そして村のみんなのこと。

まだ輝かしい、村での日常を見つめながら、彼は瞳を閉じた。

その時、何かグデシの身体を押しした。

力なく立ち尽くすだけだったグデシが、横合いから吹き飛ばされる。

そのおかげで、炎龍の顎から逃げる事ができた。

グデシを突き飛ばしたナニカは、超スピードで迫る炎龍の頭部に捕ま

り、ひらりとその上に乗った。

それはもはや絶技ともいえる身のこなしだった。

そのまま黒い影は、左目に突き刺さったままの矢に鋼を当てた。

炎龍から絶叫がほとばしった。

炎龍は勢いのまま、壁に激突していく。

黒い影はその前に空中に飛び出して、一回転して着地する。

痛みに呻きながら暴れまわる巨体を尻目に、影が立ち上がる。

グデシが、恐る恐る目を開いた。

彼の目には、遠くで暴れまわる炎龍と、その前に立つ男の背中が

映っていた。

彼はその背中を持ち主を知っていた。

「父ちゃん？」

それはあの日、死んだと思っていた父、ヨタのものだった。

ヨタは炎龍をまつすぐと見据えながら、倒れ伏す息子にこう応え

た。

「待たせたな、グデシ」